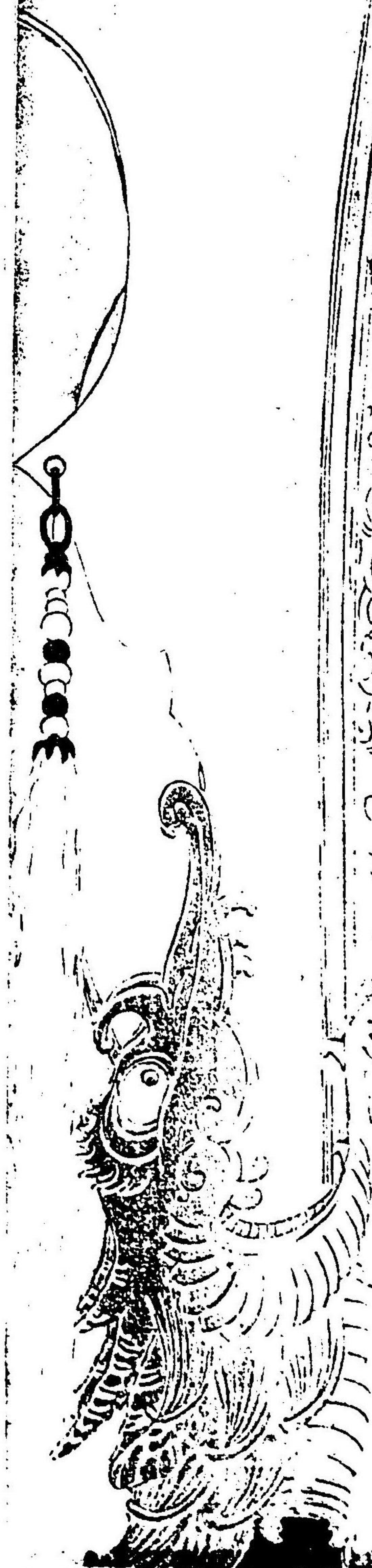


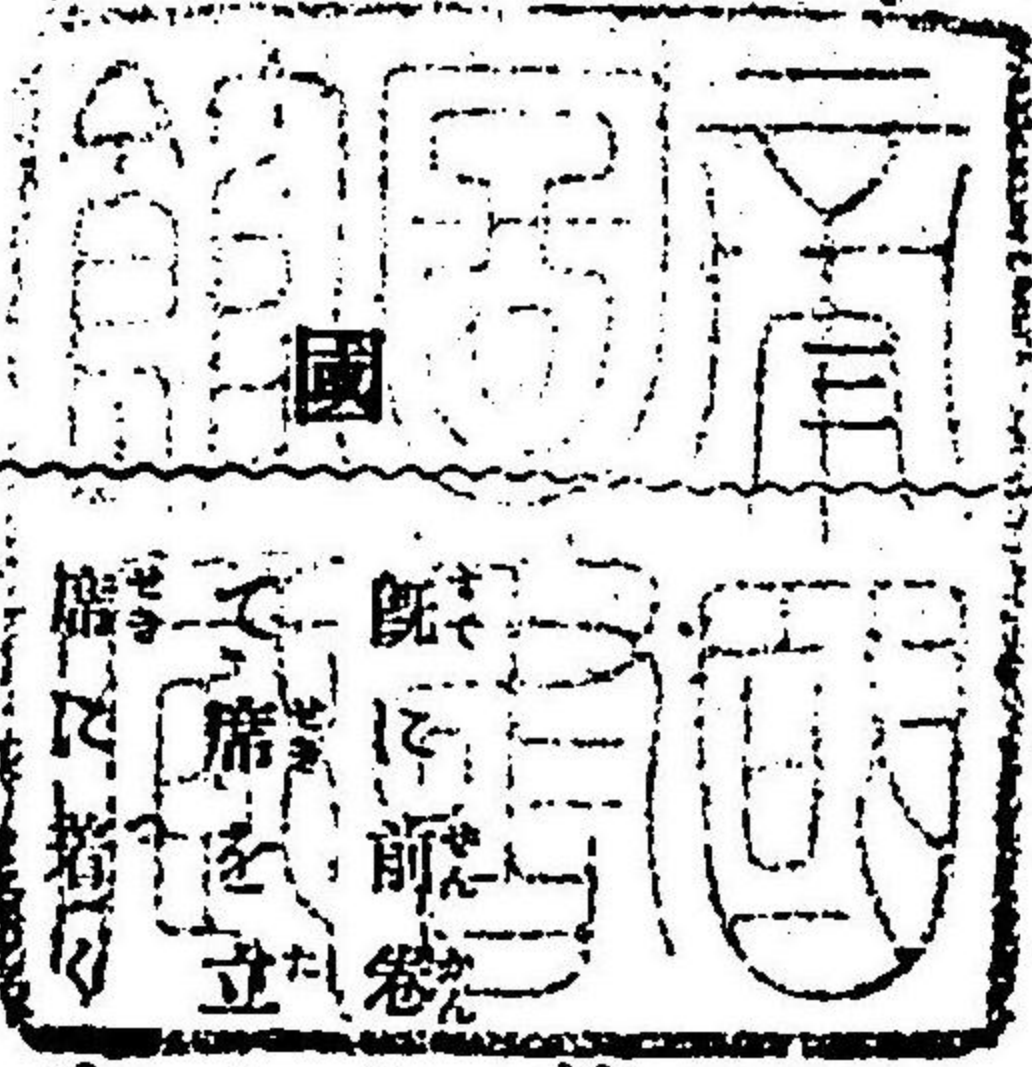
7962

三國志

桃川 櫻林 講演
今村 俊郎 速記

五之卷





志

三 國 志 卷 五

第一 席

今 桃 川 燕 林 講 演
村 次 郎 速 記

軍 先 生 招 いたるより今日に至るまで今の功をもなさず誠
 先 生 の 英 名 は 豫 雷 の 如 くに 承 知 いたしたり、然れども劉備將
 是 を 追 歸 さうといふ心 底 勿 論 此 の 張 昭 再 たび 禮 を して 曰 く 張
 奇 機 と して 張 昭 初 め 文 官 は 忽 ち 孔 明 を 一 言 の 下 に 言 伏 せ 尙
 席 前 卷 につと雖ども魯肅の説を聞いて再び衣を替へて其の
 既 前 卷 にも 申 演 べ ました ら ば 諸 葛 亮 の 言 葉 に 孫 權 一 度 怒 つ
 一

三 國 志

氣の毒なるは玄徳にして今は無祿無城の身の上とあり既に路
頭に迷うの有様如何なれば先生是を其儘に捨置かるは人倫
の道を欠く處ならんと思ふ何故玄徳を扶けて大家ならしめん
といふ事を務めざるか其邊を承知いたしたい孔明胸中に扱は
此の者我れを飽までも嘲けり蓋かしめんとするを見たり依
つて此の者を第一番に言伏せて終はあければ孫權を説いて軍
を起し王人を大家させる事は思ひも奇らきと心得ましたから
大口を開いてカラ／＼と笑ひ孔明張昭の一言ハ其の意を得
大鵬の心は雀の知る處にあらき世間を病人に譬へて申せば病
いの重る時には據ころなく粥を勧め、其他柔らかなき物を勧め
腹内を整のへ後に至つて強き物を勧め、又肉食をさせ力を附け
るやういたす如何に名醫の配劑を受けると雖も疲れたる者
に強き薬を服ませ、肉食を勧めれば却つて病いに逆らい、夫が

三 國 志

に命を捨つるに至るべしと古今の例を引いて儘々に張昭を説
いたる時に流石の張昭に於ても一言の答ふる言葉もあらず
をして退がるど又一一人聲を發し ○諸葛亮に尋ねるが曹操は
如何なる人にて百萬の同勢を以つて此國を對手に戦かばんと
するに如何なる計略ありや是に勝つに如何なる法を以つてす
るかど一聲高く申したるゆゑ名々何者かと思ひ孔明も全じく
是を見れば願雍と申そ者あり孔明此時に至つて孔明大敵と見
て驚ろく事勿れ既に曹操手に百萬の勢を有と雖も戦争に
規律なし是を破らんとする事易しと言終るや又此方の方より
して歩歩歩孔明に相尋ねる、尊公は蘇秦張儀の辨舌を學び三
寸の舌を動かして我君を悉とく説いて戦争を勧めんといた
とるか孔明此の様子を見て居りましたが孔明ハ、ア其許は何
と仰せられるか 歩某かしは歩歩といふ者なり 孔明オ、呉の

三國志

に至り大いに怒つたるものと見え暫らく虞謙の顔を見て居り
ましたるが孔、御邊は如何ある人にて候ぞ、虞某がしは虞謙に
て候、孔、ウム、呉の國に儒者あり、是を虞謙と呼ぶと聞きしが扱
は御邊あるか、御邊は曹操の大敵なるを恐れ、是は降参をさすの
志ざしありと見ゆるが抑うも曹操は天子の勢はいを假りて四
百餘州を手に握らんとする國賊なり、今我國に望みを懐ける國
賊に對し賞賛の言葉を發するは如何ある譯ぞと云はれたる時
に、其儘虞謙に於ても頭を下げる、又其の跡へ丁奉といふ者進
出で、丁、曹操は相國、曹參の後胤あるに玄徳は中山、晴山の劉勝
の後胤と稱ねれども其証據なし、彼は一度、趙を繼り、杏を商なつ
て、今日を送りたる者、曹操を敵として取かはんとするは、大いな
る誤まりなり、孔明此の時、暫らく其の様子を見て居りました
が大開口開いてカラ、と笑ひ、孔明主人玄徳は一度、賤業に落し入

三國志

國に聞及んだる歩、歩とは其許あるか、貴公は蘇秦張儀の辨者な
る事を知つて、豪傑なる事を知らざるか、蘇秦張儀は辨を以て能
く敵を破る、其の事は能く世の人の知る處にして、勇者も又敵を
討つ事は遙に及ばざる處、あれば則ち之英雄ならずや、我れ蘇秦
張儀に及ばずと雖も、其志しは全し、何を以つて是を笑ふやと
云はれたる時、歩に於ては其儘に頭を下げる、又右手の方、孔
えたる虞謙進み出でたる事にして、虞謙曹操は如何ある人を、孔
明答わて曰く、孔、彼は漢の賊あり、虞謙是を聞いて、大口開いて
打笑つたる事にして、虞何故あつて漢の賊なりと云はれるぞ
夫天下は一人の天下にあらず、天下の人の天下なり、曹操今日天下
を三分に別ち、おば其の二分を保ち、勢はい盛んにして、容易なら
ざる大將なり、劉備、玄德、今是と取かはんとするは、鶏卵を以て大
石に當るに如しく、鼠の虎の髯を撫るが如くあらん、孔明此時に

三 國 志

ると雖も中山晴王の後胤たる事は明らかなる証據あり、假令其の証據なきにせよ、戦かいをするに何ぞ古し之の貴賤を論ぜんや、足下の如きは虚勢を恐れて自から其の國を失なう事を知らざる者ありと言葉鋭く陳べたる時に丁奉に於ては其位退がる其外入替り立替り種々ある議論をいたさんとそれども孔明の爲めに一々説破られ誰あつて是に打勝つ者がございませぬ暫らく其の様子を聞き居たる孫權聲を放つて孫最前より孔明の論きる處を聞くに一々面白し我れ又此處に再び會議を開くに依つて魯肅一度諸葛亮を案内して旅宿へ下げ相當の手當をいたそやうに魯肅こまり奉つると魯肅に於ても此處に孔明が居れば面倒だと思ひ自身に案内をして旅宿へ下げ、さまゝに手當をして是を待過し己れに於ても飽まで孫權を説いて軍さをなさんと思ひ又魯肅ばかりではあゝ武官の人々に

三 國 志

於ては何れも開戦を主張して居り武官の人々は成たけ程やかに濟ませたいといふのであるから兩派の議論區々でございませぬが中々是は容易に決しませぬ相再び會議を開き孫權に於ては大勢の議論を聞き武官文官の争をひ愈よ激しく相成り交した時に吳夫人進み出で、吳將軍何故あつて斯る事に迷ひ玉ふぞ我れ最前より言葉を出ださうと思へども將軍を掲いで婦人の身として先に言葉を開くも如何と思ひ差扣え居りたるが此場に至つて尙其の處置に苦しむといふは何事あるや兄孫策の遺言を忘れ玉ひしか是は兄孫策が死に臨んで弟の孫權に對して言遺したる言葉に内事決せざる時は張昭に問え外事決せざる時は周瑜に問へといふ事がございませぬ今吳夫人に云はれたので孫權思はを膝を打つて孫ア、我れ忘れたり如何にも兄孫策の遺言に内事決せざる時は張昭に問え外事決せざる

三 國 志

時は周詡に問へといふ言葉のありたるに今日まで徒づらに會
議をあして事を決せざりしは我が誤まりありされば早々周詡
を呼ばしめて事をいたさんといふので早速に使ひを走らして都
陽湖に居る處の周詡の許へ使ひを走らせしといふ事を聞いて
周詡に於ては既に曹操の兵が間近く來りしといふ事を聞いて
都陽湖に於て頻りに訓練をして居たる處へ俄かに主人よりの
使ひでございませぬ此の國に於ては大勇無双の人物にして
事ある時に臨んで第一番に役に立つべき人早速に都陽湖に
て登る孔明も此の周詡といふ者の事を知つて居るから魯肅か
ら其の事を聞いて密かに相談を遂げ周詡立歸つて來たらば第
一番に此の者を説附けんと周詡の立歸つて來るのを待つて居
りまする、

第一席

三 國 志

周詡は使と共に船を走らして都へ立歸りまして固より此位
の人のゆる立派の屋敷がございませぬから自分の屋敷へ着いたし
明日は會議室へ罷り出でし其の評定の席に於て充分に議論を
吐かうといふ心底其の日は疲れて居りますから休息をいたそ
つもりで静かなる室に於て茶を喫して居りまする處へ、パツ
／＼とパツ／＼と蹄の音がいたしませぬから高き所より見下して
居る門前に馬を留めたる様子何者かと思へば魯肅でござい
ませぬ暫らくいたそと取次の者が夫へ出まして取魯肅が見え
られて御目通りいたしたとき由を申せし周ア、固より兄弟同
様な間柄何の遠慮のあるべき今是れにて來つたる様子を見届
けた位ぬ早速案内をいたそやうに直に取次の者の案内によつ
て魯肅は夫へ昇り先づ一應の挨拶が済んだ後に魯叔義兄愈
よ曹操百万の勢を率て漢口の邊りまで罷り越した其の義に就

三 國 志

て我が君初めとして文武百官様々に評儀をいたしたれども何
分にも議論決せず孔明も既に我が國へ來つて共に主君を説て
戰ひを勸むれども文官類りに之を拒み我君も夫が爲に未だ決
斷を下し玉はん周ハ、ア諸葛亮は此の地に來り居るか魯
されば彼れは劉備玄徳を助け屢々曹操の兵を備ましたる事は
能く人の知る所某し此度び劉琦の許へ到つて玄徳に合ひ尙は
孔明を此の國へ案内して來り今日も文官を對手に大に議論
を闘かはしたるが終に吳夫人の發議によつて先君の御遺言に
基づき外事決せざる時は周瑜に問へといふ儀に就て貴公を迎
ねたる次第夫に就て明日會議室へ御出でになり貴公が降參す
るが宜しいと言でもか言ひにあらんと降參にあら唯今曹操に
ありといへども恐るゝに足らざ一方は劉備玄徳を大將として

三 國 志

孔明を元帥として戰かはしむるに於ては曹操といへども決し
て恐るゝ所はあいな明日の會議には必ら義兄推んで開戦を
主張して貫ひたい實に吳の國の興廢は明日にあり之を内々申
上んと存じて罷り越した周イヤ是れは魯肅貴兄にも似合は
ん事をいふ我れ固より軍人だ膝を曲げて曹操に降參するが如
き事は誓つてあいな將軍若し決斷に苦しむ時は我れ誓つて戦ひ
を勸め開戦を促がすに依て其の義は安心せられたい決して降
參するあどいふ事々あいな同じ事でも和談ふればまだしも降
參などいふ思ひも寄らん事である明日は必ら某し開戦の義
を主張し戦立を説いて劉備玄徳を一方の大將として殊に諸
葛亮といふ軍師があれれば恐れる所はあいな又一方は我れ不肖な
から海軍の都督として充分に船を動かして陸軍には貴公をばし
め多くの英雄扣えたれば海陸一致して彼に當るに於ては聊

三 國 志

さかも恐れる所はない、就ては魯肅諸葛亮先生は何所に居らる
しか魯旅舎に在りて今夜は休息を致して居る 周甚だ恐縮で
はあるが諸葛先生を是れへ案内をしては呉れまいか明日演る
事を此の所に於て打合して置きたく存するが 魯夫れはいど
易い事、左様申したらば定めし亮先生も喜こばれるであらう然
らば直に拙者は馬を返して旅舎へ参つて諸葛亮を案内をして
再たび参る事に致さう 周大儀ながらどうか然ういふ事にし
て貰ひたい我れ又船の勞れはありといへども諸葛亮が来らば
仮令徹夜するも厭はせ能く事を談するの心底である、魯肅大に
に喜こんで 魯されば只今より亮先生を案内して参らうと其
儘座を立て一旦暇乞ひをいたし門前に繋いであつたる馬に乗
たる事にして魯肅は喜こび勇んで直に孔明の旅舎へ参る、此方
は周瑜是から先づ酒の一口も飲まうといふ心算で支度をして

三 國 志

居る處へ取次の者罷り出で ○御來客でございます、張昭顧雍
張紘、歩陟の四人馬を並べてお出でにありましてお目通りを致
したいと申しませ 周夫は何れも文官にして容易ならん人達
早々是へ通すやうに早速四人の者を案内いたし面々一様の装
扮をいたして 張扱永らくの間鄱陽湖にあつて軍事を司つて
居られたる段御苦勞に存する就ては張昭改めて都督に申上げ
るは此度曹操百萬の同勢を卒いて漢口まで来り夫が爲めに將
軍大いに怒つて屢々評定をいたし、今日は玄徳の許にある諸葛
亮孔明を招いて其の軍議の席に若かしめ其の意見をも尋ねた
る處彼言葉を巧みに將軍を説いて曹操と軍さを起さしめ己れ
中間にあつて大利を食はらんといたす様子、今懸じいに戦か
ひを開き破れを取つて永く耻かしめを受けんよりは一度此處
で降参をして時を待つて事をいたしたる方が呉の國の爲に甚

三 國 志

此よりましたと取次は退がる間もなく程普先に立つて何れも
 夫へ入来り軍人であるから援援も淡泊でございませう程叔周
 都督實に意外なる事が出来たした文官の者が漢口まで曹操
 の兵が来たつたといふ事を聞いて大いに慄え夫が爲めに今日の
 評定に議論決し兼て居る就ては尊公明日の會議の席に於て戰
 かひを主張せらるゝか又降参を好しといはるゝか其の議を承
 まはりたい此時周瑜大勢の顔を見て周其儀に於ては別段に
 尋ねるに及ばん私に固より軍人であつて見れば戦かひを主張
 するは勿論の事で仮令曹操が何萬の勢を以つて來るも恐れて
 降参をするおとしいふ事はない某がし明日は君を説いて速か
 に開戦をいたそ心算である程ウム開戦を主張せらるゝか夫
 を聞いて我々大きに安堵いたした周先刻も文官達が参つて
 降参を勵めて呉れといふから某がし大いに怒つて追歸した位

三 國 志

はだ得策であらうと我々は心得るが明日の會議に於て若し都
 督が戦かひを主張せられるに於ては我々の苦慮も水の泡と相
 成る願はくは都督將軍の御前に於て降参の事をか勧めに相成
 るやう夫を申上げん爲め斯く打揃つて罷り越したる次第で
 ざる周夫は御苦勞千萬某がしは固より各々の仰せが
 くども此處に於て一旦降参をするが得策であるといふ事は
 じて居る明日の會議に於ては拙者降参の儀を申し出でるに依
 つて各々御心配なさるな是を聞いて四名安心をして周都督さ
 へ承知をすればモウ少しも心配をそる處はまいといふので
 こんで四人は立歸りました夫から愈よ一口やらうと思つて居
 る處へ又取次來つて○御來客でございませう周蒼蠅いさ誰
 が参つた程普黄蓋鄱統其外武官の人々十四五名にてお出で
 ありました周然うであるか早速案内をいたすやうに○

三 國 志

然るに其の一言を聞いて大いに安堵いたした必ら其言葉に逆
に向つて開戦を勧めるやうに取計らはんと思つて是へ参つた
来る心を穿た其夫は千萬忝じけおれ我々尊公を説いて明日君
々々挨拶もいたさず周瑜は兩人に向つて周イヤ早速だが最早
早速は案内をいたせ間もなく足音高く夫へ入り来りました
、呂蒙甘寧の二人は軍人中に於て最も勇猛活潑の者である
でございまして呂蒙甘寧の御兩人お出でにありました周
ます周とうも大層客が来るか今度誰が来たか
をしやうとそる處へ又々取次夫へ来て
○御來客でござい
日の事を約束をして何れも立歸りしました周瑜酒を飲んで休息
顔を見合せ安心をいたし其内に茶などを出し雑談の内に又
めだ程流石は周都督の計らい恐れ入つた一同の者互ひに

三 國 志

る玉ふな周我れ固より軍人にして暇かひを好む處何ぞ思は
しき降参おを鞠むる事のあるべき其儀に於ては安心をして
明日にも戦かいを開くの用意をして待つて居玉へ呂夫を聞
いて我々兩人大いに安堵いたした最早尊公さへ開戦を主張そ
るといふ事におれば評議忽ち一決するのだ先づ是を聞いて
安堵いたした二人は喜こんで立歸る周瑜もガツカリして船
から上つたばかりで休息もいたさず替るく來客の來れる爲
め一層疲勞を覺えたりモウ誰も來まいから緩くりと休息をい
たさうといつて居る處へ馬の頭を捕へて静かに夫へ來れるは
魯肅と孔明でございます早速取次より其の意を通じたに依つ
て周瑜は能く玄關へ出迎いつて居る此の孔明は豫て馬を下
り魯肅の案内に連れて夫へ來りし様子此の孔明は豫て聞いて
居る諸葛瑾の舎弟其様子を見れば身の丈七尺に秀で色白くして

三 國 志

て鼻高く願に聊さかの鬚を時は一滿面に愛嬌を合んで入來り
ました周瑜胸中に成程是は人物だと思ひ又孔明も周瑜の様子
を見るとき身丈八尺餘り吳の國に於て一二を争さうほどの武
人一見して英雄とこそ相見えまそ扱兩人を案内して各々座に
着き禮を施こし周初めて對面をいたす某がしは周瑜と申
する者豫て聞及ぶ諸葛亮孔明とは尊公なるか兄の諸葛瑾には
親しくいたすと雖も運拙なくして未だ亮先生に拜顔を得さ
りしに今日聞らすも徳を是へ枉げ玉ふは誠に某がしの喜こぶ
處と可憐に挨拶をいたしました孔明に於ても禮を施こし挨拶
終つて魯肅夫へ進み出で魯扱周瑜最前の仰せに従がつて
亮先生を是へ御案内申し九が就ては明日の會議に於て開戦を
主張する其の儀に就て打合せ等いたして置きたく尊公より宜
しく亮先生へ御相談に預かりたい周瑜魯肅の顔を見て居りま

三 國 志

したが周イヤ魯肅實は尊公とは少し反對で魯反對とは
周明日某がし將軍の前に出れば速かに降服を勧める心算だ
魯ナニ降服を……何で降服を勧める周能く考がへて見なさ
い今曹操は百萬の勢を握り殊に天子の命令に依つて諸國を一
統するの勢はいなれば中々今是に當つて戦かいはをさども勝
利を得る事憂束あし依つて殘念ながら暫らく彼に對し降参の
意を表し軍備整のうを待つて軍をいたすこそ得策あらんと存
する依つて明日某がしは將軍に對し降服を勧むるといふ事に就
ざる魯夫はさうも大層違う最前開戦を勧むるといふ事に就
て諸葛先生にも面會をしたから案内をして呉れといふ言葉
だに依つて態々是へ連れて参つた然るに此場に至つて右様に
仰せられては斯く申する魯肅甚はだ迷惑をいたす周イヤ某
がしも然うは思つたが何も今降参をするといつた處が國を渡

して終らざるも、いづれに涙を呑んで曹操の言ふ言葉に従か
つて居れば二年でも三年でも経つ内に却つて曹操に降参をさ
せるやうにいたるも、尊公も暫らく忍んで我がいふ處に従が玉
へ魯肅此の時に面色を變へて突然周瑜の傍へズカ／＼と進ん
で魯周都督尊公も呉の國に於て一二を争さう武官ならせや
國家の大事に及び舌を二枚に使い事を腰膝に附せるといふは
實に卑怯未練の致し方今一言いふて見玉へ其分には捨置かん
と既に横たへたる劍を引抜かんとする様子周瑜に於ても目の
色を變へ周瑜劍を抜いて我れを切るの心底あるか切れる者
から切つて見よ我れも周瑜あり汝の劍に觸れて死するやうな
者ではあいと已れに於てもアハハ劍を引抜んぞ有様既に此處
に於て龍虎の争をそのを見るの場合に至りましたが孔明は敢て
留めもせず暫らく笑を含んで暫らく其様子を見て居りましたな

が頼み言葉を開いて靜かに周瑜を説き終に是を服さしめて戰
争立をいたす事に相成る一條は次回に續いて申上げませ。

第三 席

魯肅に於ては只管に合戦を好めるによつて周瑜が孫權に對し
て降参を勧めるに聞て面色を變じて大に周瑜を罵ります
周瑜は飽までも降参をして呉の國の安寧を保たんといふので
モウ終ひには切合ひにも及ばんとする有様孔明傍はらにわつ
て暫らく其の様子を見て居りましたが頼て口を開いて孔
豪傑先づ暫らく怒りを留めて我がいふ所を開き玉へ魯肅が周
將軍の前言に反するを怒るも理り又周瑜が曹操の大敵に輕々
しく當り難きを知つて降参を勧めんといふも尤もな事なが
ら併し周瑜曹操を破るには敢て兵を用ゆるに及ばせ従つて多
くの兵糧を失ふひ人民を苦しめども二人の女を曹操に送ら

三 國 志

は忽ち彼れ兵を退せざるに相違ない周是は亮先生の一言
其の意を得せ二人の女を曹操に送つて夫で曹操が兵を率て歸
國をするといふは珍らしき事のある物哉其の二人の女といふ
は如何なる者ぞ百万の兵を率ゐて己に漢口まで来て居る者を
只二人の女を送つて退せどかしむるといふは餘りに不思議抑も
其の女とは何者あるか先生之を知り玉は、語り玉へ 孔是は
したり知らざる事を何しに申すべき其の二人の女といふは某
がしまだ隆中にあつて田夫野人を友として居りし頃には北
國の者來つて曹操の物語りを致したるが曹操近頃瓊河の邊り
に臺を築いて之を銅雀臺と稱け十日の中に造營を果り常に酒
を好み色に溺れて甚は美女を愛して居る然るに尙曹操之に
足らざりて茲に二人の女を悉く慕ふて居る夫は曹操が未
だ書きたりに時に諸國を修行して吳の國へ到り或る家に宿り

三 國 志

を求めたる所其の家の主人といふは喬公といつて其の時に年
齡稍五十にもあらずと云ふ人二人の女子あつて姉を大喬妹を
小喬といひ何れも絶世の美女あるに曹操書生の折柄とは云ひ
あがら性色を好む者であるから鐵面皮にも主人に向つて我れ
今日斯様な書生ではあるが今思ふ事充分に達する時はどうか
御身の娘を貰ひたいと云ひたる時主人曰く二人の娘の中何れ
を好まるとかど問ふに我が望む所は一人にあらせ二人の娘を
貰ひ姉は妻とし妹は妾となさんと答へた其の時喬公大めに笑
ひたるか併し此の書生中々膽力が剛い二人ある娘を二人とも
に貰ひて姉を妻とし妹を妾とするの心底面白しと思ひ曹操に
向つて如何にも二人の娘を望むとあらば御身帝王の位に即て
來れ帝王に相成らば何日にも二人の娘を望むとあらば御身帝王の位に即て
探喜こんで固より今貰ひたる所が仕方がない今より十年を出

三 國 志

きして帝王にあつて必らず其後追々に登進をして今日已に動
命ありとあつて諸國を悉く平らげ呂布を討ち河北の袁紹
を平らげ又荆州の劉表は病死せしかりといへども九郡四十二
州は手を握りて十分の望みを遂げ此の上吳の國を討て終に帝王の
臺を造つて二人の望みを遂げ此の上吳の國を討て終に帝王の
位に即き而して二人の婦人を手に入れんといふ心底されば今
若し彼の二人の婦人を曹操に與へなば吳の國を取るの念を捨
てし速やかに兵を引くに相違ない去れば今戰ひの評議を疑す
よりは喬公に命じて二人の婦人を曹操に贈る事を扱かはれな
ば夫にて國の安寧を保つに至るべしと之を聞て馬瑜滿面に朱
を濫いだるやうにあつて周亮先生其の儀は偽はりではござ
らぬか夫ども又確かある證據があるか其邊を承知したい孔

三 國 志

されば孔明證據のない事を必らず申す者にあらず銅雀臺を造
りたる時に曹操の次男の曹子建といふ者悉く學者にして
其の爲らば必らず二喬を娶らんといふ事が記してある周
と其銅雀臺の譜といふのを先生暗記して居られるか孔左様
ム其銅雀臺の譜といふのを先生暗記して居られるか孔左様
暗記致して居る周願はくは其の所に於て拜見をいたしたい
が如何で孔夫は最と易い事速やかに御覽に入れやうと孔明
硯を引寄せ筆を執り忽ちスラと認ためて周瑜の前へ出
して孔是で一点の違ひもない私も餘り面白いと思ふから悉
ごとく暗記致して置た周都督之を見玉へといつて夫へ出した
其の銅雀臺の譜に

從明后而嬉遊兮登層臺以娛情見大府之廣開兮觀聖德之所營
建高門之嵯峨兮浮雙闕乎太清立中天之華觀兮連飛閣乎西報

三 國 志

臨漳水之長流兮望園果之滋榮列雙臺於左右兮有玉龍與金鳳
挾二喬於東南兮若長空之翺翺俯皇都之宏麗兮瞰雲霞浮動欣
群材之來華兮協飛熊之吉夢仰春風之和穆兮聽白鳥之悲鳴雲
天垣其既立兮家願得乎雖逞揚仁化於宇宙兮肅恭於上京惟
桓文之爲盛兮豈足方乎聖明休矣美矣惠澤遠揚翼佐我皇家分
寧彼四方同天地之醉量兮齊日月之輝光永貴尊而無窮公等君
壽於東星御龍旗之遊遊兮遇鸞駕而周彭思化及乎海宇兮嘉物
阜而民康願斯臺之水固公樂終古而未央
周瑜其の孔明の書たる譜を暫らく見て居りましたか彌よ満面
朱の如くにあり、ヒリ／＼ヒリツと忽ちちの間に其の孔明の書
いたる譜を引裂いたる事にして、ハツタとばかり孔明を睨んだ
り、諸葛亮此の様子を見て孔明はシマリ周瑜督何を左様に怒
らるゝ、二人の婦人が敢て英雄といふではあし、其の婦人二名を

三 國 志

遣はしなば曹操必ら兵を引ひて國へ歸るといふ事に附て其
の証據の譜を見せられたればとて左様に色を變へて怒らるゝにも
及ぶまい、何故あつて左様に怒り玉ふぞ周然れば今銅雀台の
譜を讀んで我れ大きに胸を痛めたり亮先生附玉へ其の大喬と
いうは當主孫權の妻にして小喬といふは、即ち斯く申せる周瑜
の妻なり、世の中に孔明位かのベテン師はあゝい、いかさま師で
さいまそ、討虜將軍孫權の妻に大喬といふ者あり又其の妹の小
喬といふは周瑜の妻になつて居るといふ事は既に心得て居て
夫を知らん振をして態と曹操が慕つて居るやうな事を言ひ即
席に銅雀台の譜といふものを作つて出した夫を眞と思つたか
ら周瑜に於ては色を變へて怒り、シテ見れば曹操は我妻を望ん
で居るかと思ふから人の常として其の者を憎く思ふのは當然
其言葉を聞いて初めて知つたる如き体をなし、孔明袖を組んで

三 國 志

禮をさし 孔許されよ 周都督我れ今日まで大喬の討虜將軍の
妻たる事を知らせ又小喬の周都督の妻たる事を知らせして右
の事を申し上げ甚はだ恐れ入つた平に無禮の段斷罪くど頭を
下げたるを見て周瑜に於ては孔明の手を取つて押殺だき 周
某がしころ諸葛先生に對し無禮なしたる段平に御用捨に預か
りたひ夫に就けても不埒あるは曹操なり我妻主人孫權の妻を
己れの側に引附けて戯むれんとおそは言語同斷さもあらばあ
れ彼を討惱まして充分に懲しめ呉れん何卒亮先生にも一臂の
力を添え玉へ 孔委細承知いたしたり我れ固より此の國に來
りしは共に事をあさんが爲めなり若し將軍曹操と戦かひの決
心をあさば某がしに於ては主人玄德と共に一方を攻め兩軍一
擧して當らば曹操如何に百万の勢ありと雖ども是を破る事何
ぞ難からん既に周都督戦かふの心を決する上は魯肅に於ても

三 國 志

怒りを解めて共に事を議すべしと孔明の許らひに依つて双方
怒まちに打解け其内に酒宴の用意に及び互ひに盃を重ねまし
たが魯肅に於ては胸中にさうも此の孔明といふ人物は大變な
者ださうして銅雀臺の譜あさといふ事を知つて居んか只一言
にして周瑜に怒りを起させ一度平和の説に傾むかんとおした
る周瑜も怒まち開戦の心を動かしたるは天晴の働らき實に
恐れ入つたるものと悉ごとく舌を巻いて驚ろいたる位ぬ愈よ
明日の會議には周瑜抽でし開戦を主張するといふ事に約束整
のいまして孔明魯肅に於ては暇を告げて立歸りました
第 四 席
翌日周瑜は會議室に至りまをる其の日は曹操の卒いたる百萬
の兵を對手に戦かひをそるか張昭の申分の通り一度曹操に降
参をするかといふ大切なる日でございませぬ然れば武官文官共

三 國 志

に何れも早朝よりして其の席へ出で、正面には孫權椅子に掛り、其の傍らには女ながらも政事に嘴を入れる吳夫人、扱右手の方を見れば文官には張昭、顧雍、張紘、步騭、虞翻、龐統、陳武、丁奉、かんいふ人々、又左の方を見れば武官の面々、意氣揚々と扣る居り、す程、普、黃、蓋、韓、當、周、泰、燕、欽、呂、蒙、甘、寧、潘、璋、陸、遜、等を初めとして、大勢、肩を怒らせ、愈よ今日こりは事を決するの日にございませ、武官は飽までも戦かひを好むは、是其の職を重んずる處にして、唐も倭も全し事所へ周瑜罷り出で、まして禮を施こしませる、孫權早くも此の様子を見て、孫、周瑜には永らく都陽湖にあつて水軍を充分に訓練せし段、子も満足に心得る、周瑜はしき母顔を拜し、周瑜身に取り如何ばかりか、大慶に存じます、從がつて今般、曹操漫りに兵を漢口の地に入れ、尙當國を襲はんとするの由を承まはり、使節と共に罷り越して候、シテ、歸は如何に御決定

三 國 志

に相成りしや、其の儀を承まはり、度く存じます、孫、然れば其の儀に就て、周瑜其方を招いた兄の一言にも、内事決せざる時は、張昭に問へ、外事決せざる時は、周瑜に問へ、といふ事あり、今日まで、屢々評議いたすと雖、さる時は、周瑜に決せざるに依つて、其方を呼んで、たる次第、此上は、其方の一言に依つて、事を決する儀であるが、如何なる志ざしであるか、憚かる處、かく夫に於て、陳べるやうに、周、恐れ入り、奉つる不肖、周瑜を夫までに思召し、下さる段、如何ばかりか、忝じけなく存じ、ます、併し、曹操より送りたる、激文有之、由、願はくば、某がし、一拜見を仰せ、附け下されたく、孫、オ、尤も、の事である、どお、手許に置かれたる、曹操より送つたる、檄文を、周瑜に渡せ、周瑜是を、押載、だき、讀下し、まそる、間に、兩眼、忽ち、朱の如く、に、ま、り、ブル、ツと、身休を、震はして、北の方を、打眺め、大に、怒つた、る、様子、周、恐れながら、申上、ま、ま、誰、敢かひを、好ま

三 國 志

る者がありまゝを評議一決いたさぬといふは茲に合戦を開くより降参をいたすを可とあそ如き事を申そ者にても有之と見えたり言畢らざる内に張如何にも降参を勸め奉つりし者は斯申そる張昭あり周瑾一ム張昭如何あれば今日に至り降参を勸め奉つりしを張然れば徒づらに勇に逸つて戦かひを開く事大いある過まちなり今日曹操百万の兵を左右し即ち天子の勅命なりといつて諸方を暴廻り實に竹を裂くの勢は東國に於ては江東六郡八十餘州を有するといへども未だ曹操に當るの力なし依つて一度降参を遂げ而して後に又戦かひをあすの時もあらん時を知らざるは之愚者なりと言葉に續いて片脇に扣えて居りましたる歩歩を初め文官何れも聲を揃へて文官如何にも國を守り國を保つての我々共降参を勸め奉つりたるに相違あし周瑜此の時に至り大勢をハツクと睨んで周御

三 國 志

身等は此の國を守つて此の國の耻辱を知らざるは今吳は三代にして江東六郡八十餘州勢八十万を有し糧は充分あり殊に大丈夫なる要害を扼えたれば曹操百万の同勢を以つて來ればとて敢て驚ろくに足らぬ此の場に至り合戦を拒み直ちに降参を勸むるは何事なるぞ國の耻辱を知らざるかと云ひながら持つて居りたる激文をペリッ引裂いて片脇に置き四邊を見渡し周瑜聲を張上げたる事にして周曹操は固より漢の賊たり直を以つて曲を攻むるに何を難しといふ事あし殊に北國には豫て曹操を狙う馬超韓遂の如き者あり曹操此の地に兵を出せば必らず北國に事を起して後ろ攻にいたすに相違あいに前吳の大軍を扼え後ろに馬超韓遂の兵を扼えたるに相違あいに曹操勇ありと雖も能く是に當り得べきや只速やかに兵を操出し國賊を討つて天下の憂ひを拂うこそ必要あり恐れあむ

三 國 志

ら君に於ては斯様なる事に迷ひ玉ふ處なく速やかに開戦の命
を下し玉ひ、而して我國の安寧を保護されて然るべくと存する
と周瑜の言葉を待たず武官の面々聲を揃へ 武官如何にも我
々大勢に於ても徒づらに祿を食んで何かせん、憚かりおがら
操百萬の同勢を以つて攻來るとも我れ海陸の兵を以つて是に
當る時は手の内の玉を碎くより易しと面々突立ち上つて開戦
を主張し勇氣勃々として居ります。
時に孫權是を聞いて忽ちの間にヒラリと椅子を離れて帯び
てお在でにあつたる所の劍を引抜いたる様子扱はと思つて見
て居る内にヤツといふと突然前の卓の端をスカリと切りま
したる様子 孫如何に面々に申す即ち周瑜の一言こそ確た
るものあり依つて我れ此處に於て合戦を開く事に決定したり
若し降参を鞠むる者あれば此の卓の如くに切捨るに依つて左

三 國 志

様心得る。と其儘に孫權周瑜に向ひ 孫今日より周瑜を大都督
として程普を副都督とあそに依つて早々戦争の支度に及べど
持つて居られたる處の劍を周瑜に渡したる時に周瑜大ひに喜
こひ三拜九拜して禮を爲し 周如何に方々右様の次第あれば
今日より降参を鞠むる者は我君に代つて周瑜此の劍を以つて
其の首を刎る、左様心得られよといつて面々に披露をいたしま
した武官に於ては何れも手を打て是を喜こび一同の者勇氣激
々として其席を離れまゐる武官は勇んで居るが文官の人々は
青菜に盞を掛けたやうな盞梅で悄然として退がる扱其の日は
周瑜我家へ歸りましたがモウどうも思ふ通り早速に孔明の許
へ迎ひを差出しました、孔明周瑜から招かれたに依つて時を移
さる其の屋敷へ参りますと酒肴の支度もいたしてございま
して 周サアどうぞ亮先生是へ 孔明都督今日會議の模様は

三 國 志

如何にして周然れば先生の議論と申し某がしの持論といひ幸は
ひにして用ぬられ君大ひに揮つて卓を切つて言葉を正し不肖
ふがら某がし大都督の任を受け程普副都督といふ事になつて
愈よ近日開戦をそるといふ運びに至りたり此上共に亮先生に
於ても餘外ながら助力をいたされたく存せる 孔承知いたし
ました承知いたしたのが併し周都督また大將の心は決しません
ぞ 周十ニ大將の心決せんとは既に卓を切つて軍令を正しう
して茲に確たる言葉を發せられし上はよも變せる事はあま
い 孔イヤ左様でない、斯う申せると恐れ入るが孫權といふ人
は物に迷う人であるから今頃は又心配をして居るに迷ひない
ア、いつたやうあもの、百萬の敵を對手に戦かひをして若し
さうでもあひ、此の呉の國を失ないはせんかといふ心配が今頃
は起つて居る大方食事もされど一室の内に入つて歎息を吐い

三 國 志

て居る時分だ一旦は尊公の勇氣に連れて大方は卓を切つて右
様に誓ひを立てたかは知らんが又側には幾らも佞奸の臆病者
がござるから其の着達が必らず様々の事を申上げると將軍又
心迷ひ玉ふは必定である 周先生は然う仰せられるが眞逆に
然ういふ事もあつたまい 孔イヤあゝ事はござらん、若し疑がひ
玉ふおれば是より罷り出で、御様子を見なさい、三尺の穂を
以つて大地を打つは外るかかは知らんが某がしの眼鏡は決し
て違はん心算だ 周然らば若し我が君心配もせられず勇氣物
々としてお在でござれたる時は尊公如何なさる 孔若し其時
は此の孔明都督の仰せに任せ如何様にも相成るでござらう是
より直ちに御前へ出で、様子を見なさい、御覽に相成つたら宜しうござ
らう 周大きに然うである、然らば早速さうしやうと話し半に
して孔明は旅舎に歸る、周瑜胸中にどうも駭年の癖に孔明とい

三 國 志

ふ奴は利口振つて居て二三是までにいふ事が當りもしたけれ
ども大將が今日會議室に於て事を決したるものを今になつて
歎息を吐いて居るなどいふ事はあるべき筈であらう大將軍
の事に就て心を碎いてお在でさるに違ひないと周瑜夜中
り出でし取次を以つて右の次第を申入ると孫權大いに驚
き夜中俄かに周瑜の罷り出でしは何か事が出たかと思召し
て早速お目通りを許されたるに依つて周瑜は案内に連れて
深き處へ参りまゐると椅子に掛つて孫權色蒼めて居ります
ハチナと思つて能く様子をみるとウーンウーンと呻つて
居る驚ろいたのは周瑜オヤは往かんぞさうも心配があ
りさうだと思つて居ると孫權夜中其方が見えたるは何等の
用事であるが其所に於て申陳べるやうにいたせ周然ればに
候左ばかりに御心を痛むる次第には無之候へども聊さか伺が

三 國 志

いたき事あつて登城仕つりました併し君は何か深く御心痛の
様子何を御心配に相成りまするか孫權イヤさうも周瑜一旦は
我れ劍を抜いて事を約束いたすといひても承まはれば曹操百
萬の兵を左右し尙天子の勅命として我國へ來るの由漫りに是
と合戦をしてさういふものであらうかといふ言葉を聞いて周
瑜も大いに驚ろき成程孔明といふ人は大才の人あり座ながら
にして君の御心を見抜くといふは恐れ入つたものと心中に只
に感心をいたしたが此所だと思ひましたから周恐れあから
君の御一言は江東六郡八十餘州を保つ御言葉と承知いたし
一旦合戦の命を下し玉ふて置きながら今宵になつて左様に御
胸を痛め玉ふといふは如何ある事あるか君に於ては夫程に曹
操を恐れ玉ふか孫權イヤ恐るゝといふ譯ではおくれさうも何に
せえ百万の同勢でア、ア、ア、ア、ア周さうさうも溜息をお吐

きにさるやうでは相成りません、然らば茲に戦かひをして必
 し勝利を得る事疑がいちいふ事を君に申上げて御心を休
 め奉つるべし、孫、ウム曹操の百万の兵を對手にして味方の利
 益ありといふは、周、左、様でございます、策一、曹操の兵は數多し
 と雖も誠に訓練をいたさざるを以つて甚はた微弱あり、是に
 反し我兵は常に軍律を守り訓練に怠たりなく、殊に水軍に於て
 は某がし充分に訓練をいたし置いたれば、何日戦かひを開くも
 更に差支へなし、曹操に於ては水軍の訓練を更にいたさざれば
 現場に臨んでトシと役に立たん、然れば敵十万の兵に對し味方
 五萬を以つて充分の戦かひををし得られるものと心得ます、
 是一ツで、孫、成、程、周、第二は彼に於ては地理不案内にして兵
 の備へ立に苦しみ進退の懸引に悩むに相違ございません、之味
 方の徳で、孫、成、程、周、第三には水が變れば従がつて陽氣も變

る必ら敵の兵士の内に病ひを起す者多くあり、是が爲めに書
 録の兵百万とは云ひ條、愈よ其の時に用ゆる兵といふたら五十
 萬には満てまいと心得ます、孫、ウム、周、第四にモウ冬向に
 至つて居りまゝから草は枯れ彼れに於ては其の馬にあてが
 いまゝ居る秣に苦しむに相違なく、我れ亦其の地理を辨まへ居り
 ます、するゆゑ彼が起り來る其の道を遮ぎり、兵糧秣の道を断らま
 すれば如何に人數多くありとも敵の力尽るに疑がひなし、恐れ
 ながら此度冬向に臨んでの戦かひは味方の幸福でございませ
 然れば必ら老御心痛は御無用に願いたう存じませ、孫、成、程
 周、都督其方の申する處一々解したり、然らば少しも早く開戦の
 用意をするやうにと俄かに又強くあつてソコで二三戦争に就
 てのお物語りをいたして周瑜に於てはお暇を蒙り御前を退
 り我が屋敷へ立歸つて参りましたが、實にどうも孔明といふ奴

三 國 志

は人の心を察する事に妙を得て居る、今は此國へ來つて右様な事を只陳べるばかりであるから宜いが此儘に孔明を捨て置く事は今に開戦に相成り彼必ら劉備玄德を扶けて一時は我が國を扶けると云ひ條行くは吳の國を呑まんとする志しあるに相違ない、二葉の内に妨ら走んば終に斧を用ゆるの憂ひあり是は曹操と戦かひをそる前に孔明を片附けて終はあければ且の國は枕を高く眠る譯に往かまいと周瑜といふ男は忠臣であるから吳の國の爲めに悉く心痛をいたし、さうも孔明を其儘に置いてはあらんといふ事に決心をいたし夫より直ぐに魯甫を招き人を遣さけ周叔魯甫茲に魯公に一言を陳べて置かんければならない事がある孔明を此の國へ伴ふ來つたるは魯公であるから夫ゆゑ話しをいたして置くが、さうも吳の國の爲に諸葛亮孔明を失なばんければあらん、既に某がしは決心をい

三 國 志

たしたに依つて此段魯公まで届けて置く魯先づ待玉へ何の罪あつて孔明を殺さんとし玉ふぞ周イヤ罪はあゝ魯罪のないものを徒づらに人を害すといふ事はあからう周イヤ罪はないが彼を捨て置くといふ事、魯の國が危ない、後難を除かんければあらん、打捨つて置けば此の國の害になるから據ころあく切らなければならんといふは今日斯様々々斯う座あがらにして將軍の志ざしを知る位かの男ゆゑ此先せん事をそるが知れん夫よりは寧ろ戦かひをする前に此所へ招いで尋常に孔明の首を刎ねやうと思ふ跡で兎や角う苦情を申さんやうに魯公に一言答いて置く魯夫は周都督心得違ひてはあゝ孔明は賢人だ、後難を憂いて賢人を切るといふは勇士の爲さる處、罪あき孔明を手に掛けて殺す時は却つて魯公の徳を失あうやうあもの夫よりは茲に一ツの計略がある周計略といふは如何

ある事か 魯孔明を永く吳の國に留め孫權將軍の臣といたし
やうにいたしたらは宜しからう 周夫は夫に越した事はな
が中々孔明は夫を承知すまい 魯其處だて兄の諸葛瑾は當國
にあつて陸軍に奉職をして居る然れば兄の瑾を招いで斯様
く仰せられるさすれば諸葛瑾は他人ではない己れの實の弟
であるから言葉を尽して孔明を留める事を請るに相違ない孔
明を留めて此の吳の孫權に仕へるやうにすれば相當の給賜を
拂つても誠に此上もあいな幸福である名玉を没りに碎くといふ
は君子のおそべき處であらう依つて周都督孔明を助けて彼れを
我手に引入るゝ事になされたら宜しからう周瑜暫らく考がへ
て居りましたが 周瑜やどうも夫は魯肅能うよそ注告して吳
れた私も只國を思ふ念よりして彼を討たんとしたが成程彼を
當國に留めて軍師に用ゆれば必らず味方の役に立つ者諸葛瑾

を以つて味方に引入れるといふは誠白い早速其事を取計らば
んと茲で魯肅と同座をして直ぐに瑾を呼びにやる諸葛瑾左様
お事とは知らぬ周瑜の許へ参りまして右の内意を含められ諸
葛孔明を説きに行くといふ諸葛瑾使節の一條に相成ります

第五席

魯肅の意見に周瑜も改心をいたし早速に諸葛瑾を招きまそる
と何事かと思ひ得て諸葛瑾に於ては周都督の方へ参りますと
兩名椅子を並べ夫に扣えて居りましてどうかお前の實弟であ
るから諸葛亮を當國に足を留めるやうに計らつて貰いたい其
代り月給はどの位ぬ進せると木に餅の實るやうな話しをそる
と諸葛瑾も自分の弟を愛して當國へ置きたいといふ周瑜の言
葉であるから悪くは思はない元來此の瑾といふ人は弟はどに
智慧があれれば天下に名も得ませうがどうも此人才子でもない

三 國 志

と見れば、瑾、エ、宜しうございます、人は何と申しても手前の實
弟で手前の申す事は必らず背く氣支はございませぬ、當國に留
まればといへば喜んで留まりませう、周イヤ貴公一人が左様
受合つても往かん我々共此所に待つて居るから亮の志しを聞
いて來て貰いたい、瑾宜しうございます、早速參つて其の事を
申しませう、けれども舍弟ではございます、中々理屈ッポイ男
で尋常の事ではいつても往けませんから又私しが其處の處を
宜いやうに一ツどうにかして……周夫は其方の智恵に依る
處だ、瑾委細畏こまりました、諸葛瑾は得意顔に周都督の方
を出で直ぐに馬を早めて孔明の旅舎へ參りました、丁度孔明は
一盞傾むけて居りました、處で兄が來たといふから早速夫へ出
迎へまして、孔先兄此方へ當國へ參つて居りながら日々諸方
へ招がれ或いは又いろくの人に見尋ねられる為めに多忙を極

三 國 志

め心にもなく兄上の許へ對して御無沙汰に過ぎ誠に相濟みま
せん、シテ今晚は何等の御用でお出でになりました、瑾イヤ一
寸お前に尋ねたい事があつて來ました、外では赤いがお前は伯
夷叔齋を知つて居るさるだらう、孔明胸中にハテナ兄が是へ來
て挨拶も祿々いたさず、伯夷叔齋を知つて居るかといふは何か
了簡があつて來たなど思ひましたから、孔アハ、ハ、之は兄
上の仰せとも存じませぬ、伯夷叔齋は賢人といふ事は聞ひて居
ります、が其實手前は辨まへませぬ、瑾然れば話しをするが此
二人は位を譲つて互いに國を遁れ、後周の文王を諫めて從はざ
りしゆゑに首陽山に隠れて周の粟を食はせ遂に蘇を食つて命
を捨てた、兄弟は其位か、に深いもの然るに御身と我れは一つ家
に生れながら不幸にして別れく、とあり伯夷叔齋の如く兄弟
生るゝ處は別なりと雖も死する時は全しく首陽山に於て命

三 國 志

を捨てたといふ此の位いお結構な事はない 亮、私に此の呉の
國へ来て今日陸軍に奉職をして居るが、前は南陽にありて常
に面を合す事も出来な、夫よりは兄を思ふから、只今より劉備
玄德を捨て、當國へ来たらばどうだ、彼の劉備玄德といふ人は
運拙なくして、今日は江夏の劉琦の許に来て、食客とあつて居て
別段末の見込のない人で、然ういう人に附て、犬馬の勞を盡すよ
りは討虜將軍に於ては、天晴銳智の御方あれば、此の人に事か
るに於ては、某がし、五分に周施をいたし、必らず、是までに勝る月
俸を與へるやうにいたすから、此の國に暫らく留まつて呉れま
いか、そうすれば、弟の均を招いで、三人の兄弟、一つ所に住むや
事になり、此上も、お目出度い事では、おいか、どうぞ志ざしを
願へし、玄德を捨て、孫權に事へて呉れるやうに、さすれば、私も此
上もない喜び、こびである、親おき、後は、兄が親、兄の諸葛瑾が、此の通

三 國 志

り頼むに依つて、よもや、畢存は、あるまいと、陳べたる時に、孔明は
ア、是は、周瑜に、吩咐つて、来たど、夫とも、魯肅に、いはれたか、我れ
此の國に、留めよう、左も、なければ、此の孔明を、殺さう、というのだ
ナ、兄の諸葛瑾は、宜い人だが、誠に、智恵、淺くして、困まる、被が、劉備
玄德を、捨て、我れを、此の國へ、留めよう、という、心底、あれば、我れ、又
其の、裏を、かいて、呉れよう、と思ひ、大口、開いて、打笑ひ、孔、イ、ヤ、誠
に、恐れ、入り、ました、先づ、兄上、一盞、傾むけ、王へ、誠に、伯夷、叔齊の、例
を、引いて、御、注、告は、面白、い、兄弟、朝夕、居を、全、じう、するは、何より、手
前の、望む、處では、あるが、併し、忠孝、義、という、三つの、内で、何れが、重
いもので、ございませうか、其の、邊を、承知、いたしたい、瑾、夫は、其
方の、尋ねる、までも、お、忠孝、は、捨難、いもので、先づ、義は、其の、次だ
お、孔、然れば、兄上、も、忠孝、を、全、どう、する、計、畧を、失、禮ながら、孔明
お、教、え、申、ませう、瑾、ハ、ア、忠孝、を、全、どう、する、計、畧、というは、孔

三 國 志

然れば只今兄上の仰せに玄德は見込のないもの當時江夏の劉
琦の許に食客になつて居る位いさういふ者に附いて居るより
は當國へ来て孫權の家來になれといふ仰せでございませすが少
々夫は違ひはしないかと思ひます劉備玄德といふ人は中山靖
王の後胤にして頗ぶる身分重き人なるが今時來らざる爲に
れなる有様では居られるが物三年を待たずして必ら天下の
事をいたし四百餘州を蹂躪するは必定元々愁情ある御方では
あけれど自然益州四十二州は此の人の手に握るやうに相成ら
うと存じます夫ゆへ手前は此の玄德を見捨てる譯に相成りませ
ん殊に我々の両親の墓は河北にございませ兄弟揃つて墓所へ
參る時には泉下に居りませる兩親も如何ばかりか喜こばしく
思ふに相違ございません就ては兄は只今より吳の孫權を捨て
手前の主人の玄德に御奉公をなさい、さすれば今は小身であ

三 國 志

るければ後日に至つて大家になるに相違ないから其時には
第一番に手前が周施を致しまそゆへ今吳の孫權をお捨てなさ
い 瑾へエー 孔手前最前より兄上の様子を伺がうに何者に
か頼まれて某がしを此の吳の國に滞在させんとするの計畧を
施こそ事と思ひます、何様に千万言を費やそと雖も手前は玄
徳を捨てて譯にありません、まだ何か用事があれば格別別段用
事があければ早々江夏へ戻りませう、主人劉備の機嫌を聞かな
ければありません身の上で、モッ重ねて其の事は仰せられんや
うに願ひます 瑾イヤ大きにござうも左様だ、何れ又參るからと
何に來たのだか分らぬ、諸葛瑾再たび馬に乗りて、ウツト
ウツト周都督の許へ歸つて參ります、途中馬上ながら 瑾俺
から見ると弟の方方が餘程機口だ、何の事はない意見を聞きに行
つたやうなもので使の役も立ない」と周瑜の許へ歸つて參りま

三 國 志

した 周 大きにどうも御苦勞であつた、其方の一言であるから
孔明 一二よく應じたのである。お 謹 誠 にイヤ恐れ入りました
周 恐れ入つた應せんかお 謹 應 せるにも應じあいに手前は
先づ参りまして伯夷叔齊の事を引いて兄弟一つ所に居るのは
何よりの樂しみであるから玄德を捨て當國へ参つて孫權の家
來にあれば申した處が孔明の申すには忠孝義の三つの内は何
れが重いと斯う申すので 周 成程面白いな 謹 面白くはござ
いませぬ拙者は忠孝が大切で義は其次にありと申しました處
が成程忠孝は大切のものであるから其の忠孝の道を全たうそ
るの計畧を教へやうと斯う申すので丸で秘しは稽古に行つた
やうなものでもございます 周 ハ、ア 謹 夫からどういふ事を
すれば忠孝を全たうする事が出事るかど申しした處が……尤と
も其の前に手前が孔明の事を悪くいふました、すると孔明が少

三 國 志

し 怒つた様子で主人の玄德は未だ時が来ないから江夏の劉琦
の許に食客同様になつて居るが中山靖王の苗裔で今に必ら
益州 四十二州は手に握る、殊に兩親の墓は河北にあるから兄弟
揃つて墓参りをしたら兩親が定めて喜ぶふであらうから孫權
を捨て玄德の家來にあれば充分に周旋をしてやると斯う申すの
でどうも孔明の爲めに散々叱言を聞いて来たやうなものでござ
います、幾ら何といつても中々それは滞在をいたしません夫
で是は兄貴の心から出たんではないから、誰か孔明を此の國へ
留めやうといふ者があつて計略を施したのであらうといつ
て大体知つて居ますよ、是を聞いて周瑾心の中に益々孔明の才
智に驚ろきました、片傍に扣ねて居りましたる魯肅、ハタと手を
打つて 魯 然うであらう諸葛瑾如きの参つたら、では孔明其の
志しは狂げまい 謹 其の位ぬなれば人を使いにはやらなくつて

三 國 志

も宜さうあるのだ 魯さう苦情をいふち兄弟の事であるから
さうであるかと思つたがさうして見れば是は尋常では中々往
けまいといふので先づ其の夜は沙汰止みに相成り諸葛瑾に於
ても家に歸り魯肅に於ても退散をいたしました其後に至つ
て周瑜は愈よ孔明を此儘にいたし置いては國の憂いになるか
らさうぞして孔明を亡き者にいたさんといふ臍を固めました
のは此人吳の國の爲めには忠臣でございませぬ然る處四五日相
經ちますると愈よ軍立をそるといふ事にあり大都督であるか
ら周瑜よりして右の次第を觸れ出し副都督程普の許へ通知を
いたしますと程普は立腹をいたして居りまする何で立腹を
して居るかといふと三十四才でもつて大都督にあり自分は五
十五才で是まで随分勳功もある身でありながら副都督を命せ
られたといふがさうも不服で叶はまい愈よ軍立をする事にあ

三 國 志

りますると周瑜には中々出来なひ、さすれば俺の處へ相談に來
るだらう相談に來たらば俺が大都督にあつて周瑜に一泡吹か
して呉れやうと思ひ當日は病氣といつて引籠り自分の竹程普
といふ者を探索に入つて置いて其の日の様子を見届け一々注
進をそるやうな事になつて居る然る處周瑜も中々の人物で
さいますから程普の來らざるを少しも構はない充分に水寒
を構へ本陣の内には自分には扣へ大將分を夫へ招いで軍令を傳へ
悉くとく軍立整のいました様子を見て程普に於ては早速其の
趣むきを父の許へ通さると程普是を聞いて大いに驚ろき程
ア、我れ誤まつり己れの方足らざるを知らせして却つて周瑜
を恨みしが今周瑜が備へたる處の水寒の様子を聞けば我れ思
ふ處の陣法に少しも違はず却つて我に勝る處ありと程普急ぎ
陣程普を従がへて本陣へ至り内々にて周瑜に面會をいたし右

の次第を謝しました大將になる人は違ひまゐる、一旦腹を立つて候みしが其の様子を聞いて自分の及ばざる事を悟り夫へ参つて詔をするといふは誠に潔白なもので周瑜笑つて周大分勤めて貰はなければならぬとあつて互ひに笑つて打解けました、扱周瑜に於ては充分備え立舉りましたが何か思ふ事ありと見えて頻りに考へて居りまゐる、處へ魯肅來りまして魯扱周瑜督今日の軍立悉く感心する處である、是れれば何時大軍を卒いて曹操が來るとも支ゑる道は充分にあり、然るに何を又都督には考へて居られるか、周イヤ魯肅の前だが、どうも此の呉の國の安寧を保つには……魯又初まつた孔明か、い、周如何にもどうも那の儘にして置ては往かんと思ふが何か宜い計略はあるまいかと暫らく又考へて居りましたが是

は己れの手を以つて殺す時は我が名義にも拘はる事ゆゑ夫よりは人の手を假りて害するが上策ありと爰に一の計略を廻らし、ましたる處却つて孔明の爲に周瑜一説の許に取控がるゝの一條に相成ります

第六席

諸葛孔明は呉の國に渡つてより未だ施こそべき計畧もあけられども併し此内に周瑜を説いて一日も早く合戦をなさしめ其中間に在つて益州四十二州を手に入れて劉備玄德に握らせよと云ふ策でございませぬ、あれども周瑜其國を思ひまゐる所から孔明を殺さんとするの念がある、名智の諸葛亮是を知つて居りまするがらトント油断なく致して居りまゐる、然る所大都會の周瑜より魯肅を以て孔明を招がしめ岸に船を浮べて案内を致しまそ孔明速やかに是に應じ元船に來ると是が周瑜の自

三 國 志

慢ありまして軍さ立てを見せようど充分に船陣を張つたる
所を孔明に見せ被が胸中に驚ろくやうにと云ふ下心でござい
まそるから案内をした孔明其有様を見ると實にどうも船陣は
流石に周瑜水軍を司掌る程ありまして數百艘の船を扱かう事
己れの手足を動かそ如く充分に固めましたる有様又陸の方を
見れば是も充分に備へ海陸とも備へ立て一言の申し分もあ
い様子既に本陣へ案内を致し申すと周瑜自から立つて孔明
を已れの席に誘ひ周先生失禮ながら是へお招き申し上げ
たるは餘の義にも候はず今日備へ立て致したる此内に何か先
生の意に叶はざる事あればお差圖に預かり度孔是はさうも
都督のお言葉とも存せませ某がしは年二十七才にして生れ落て
聊か兵學を學ぶと雖も未だ其極に達せず先生は水軍の大都督
にして實に呉の國には有名なる御人此船陣を見るに聊さか欠

三 國 志

たる事もなく斯ばかりの陣立を致して居れば曹操百万は愚か
幾多の大軍を卒いて是に來ると雖も開戦と相成て勝利あるこ
と疑いおし周イヤ先生より御賞賛に預かつて如何ばかりか
悉しけおい就ては聊さかお尋ね申したいと云ふは先生は居な
がらにして天地を呑するの氣あり實に兵學に長じたる事は我
れ人よりも既に是を知る所斯申せる周瑜も豫て一步譲る位
の亮先生お手前に開て聊さか迷いを解んとするは先頃曹操河
北の袁紹を討つたるが彼れは人数と申し軍師と云い充分に備
へ居るに拘はらず曹操の爲めに易々と破られたるは其原因あ
くてはならんが何で袁紹が曹操の爲めに破られたるか孔是
は都督此間も物語りたる通り曹操早くも袁紹を討つての心底あ
つて兵糧を先きに焼て終つた夫が爲めに河北の兵は兵糧に差
支へて忽ち破れた尤も戦争に就て敵の兵糧を焼くと云ふ

三 國 志

は往々ある事只是は兵糧を焼たのト曹操の運の良いのとで
紹は様よくも負たのはとちも致方がない
周成程敵の兵糧を
焼て曹操大いなる勝を得たるか其議に就て先生にお頼みがあ
る江漢の地まで百万の兵を進めたる曹操既に聚鉄山に兵糧を
積んだりと云ふ事を承知致そ彼の地は荆州の地に於て能く先
住は其地理を御存じであらん願はくば開戦になる前に聚鉄山
にある所の兵糧を残りす焼て頂だきたいがどうであらう其
さへ成らば曹操一戦さもなく敗走を致すに相違ない亮先生一
つ聚鉄山の兵糧を焼て貰いたい傍へに聞て居りました魯肅は
驚ろいた其外心ある者一同に周瑜の顔を見て怪しからん事を
云ふ人だよもや孔明是を承知はしまいと思ふに孔明夫れを聞
て孔明イヤ左様か我れ此國に來つて滞在を致して居るが未だ
是と云ふお士産も差上げ心苦しく存じ居りたる所都督より

三 國 志

聚鉄山の兵糧を焼く事を某がしに仰せ付けられたるは誠とに
悉しけあい委細承知致した 周速やかに焼て貰いたい 孔へ
エー宜しい速やかに焼きませう何れも聚鉄山の兵糧を焼く位
最易い事早速只今行つて焼て來ませう面々は驚ろいて居ると
周瑜は周アイヤ先生軍中に虚言なしと云つて今日開戦の前
に若し偽りがあると軍陣への恐れあり正に兵糧を焼くの見込
があるか孔明私も其位の事は充分に心得て居る兵糧を焼く
位朝飯前のお茶の子 周朝飯前のお茶の子……孔明度行
て御覽に入れると其儘に孔明椅子を放れ元の船へ歸らんとな
したるの様子續いて夫へ参りましたる魯肅 魯先先生暫ら
くお待ち下さいい何で新様を事をお請になつた又周都督も徒づ
らに聚鉄山の兵糧を焼くと云ふ大役を先生に依頼すると云ふ
は其意を得ざる事先づ暫らく此船に止まるやう 孔明イヤ魯肅

三 國 志

の言葉だが既に約束を致したる以上は猶豫致する場合でない
一寸行つて焼て来やう 魯先生どうも夫は近頃軽々しきお言
葉 孔イヤ造作もあいな 魯全たくでござるか 孔譯はない併
し魯肅の前だが噂さそる事といふものは多く違はんものであ
るが此度は實にどうも私も大いにお可笑い事がある 魯ウム
噂さをそる事は違はんと言ふ事とは何でござるか 孔能く人の
口吟みにも呉の國に名士二人あり其名士二人と言ふのは陸に
在つて能く戦かいはをそ者は貴君だ又海に在つて戦かいはを
そ者は周瑜と云ふ事を申して居る牙ある物くは角なしと申し
たもので貴公はさう云ふ事はあいかれども周瑜はも少と軍
事に鋭い人だと思つたが思ひの外の人物だ某がしを頼んで
聚鉄山の兵糧を焼うと云ふのは近頃大都督と云ふ名義に背き
甚はだ宜しくあいな事で陸の戦かいは左までに怖いと思つて居

三 國 志

るさう云ふ心底では仕方があいな併し懸された以上は夫を遂げ
まいと云ふ事はあいな速やかに事をす 魯少々先生御待ち下
さい聊さか考がへもござるかから御出船にある事を暫らくお待
ち下さい元船へ止めて置て再び大都督の本陣へ参りたる魯
肅 魯イヤどうも魯孔明悉く貴所の事に就て笑つて居
りませ 魯笑つて居る恐らくは笑つて居るのではあからう後
れは泣いて居るのだらう一度承諾を致したものでだから仕方があ
い破れるまでも聚鉄山へ趣むかあければあらん魯公ゆゑ實際
を打明るが過日も申を通り彼の孔明を話して置ては呉の國の
後の憂ひとなると云つて彼れを我が手に掛て命を絶つに於て
は賢士を討つたりと云ふて世の譏りも如何御身の一言に依つて
我れ手を下す事を思ひ止まり幸はい彼れが慢心おしたるに依
て聚鉄山の兵糧を焼く事を承諾し五百八百の勢を率て聚鉄山

三 國 志

に至ると雖も曹操別に在り大軍を以て扣へたる所へ何しに孔明の如き者が行れやうか必らず其所へ落命を致そに相違ない曹操の手を借りて國の憂いを拂はうと云ふ某がしの技倆はさうだ愈し一言もあるまい魯所がどうして大違ひ只今亮に面會して様子を見ると笑つて居ります笑つて居ると云うのは呉の國に海陸の名將二人あり不肖には候へども某がしを差して陸を守るの名士なりと云い又船を浮べて戦かいをなさんとする者は周瑜であると思得たる所大いある過まり周瑜は船の戦さのみ心得て陸の戦さを知らざるゆへに敵の兵糧を焼く事を斯申す孔明に依頼なま實に大都督の任に背いて居る象鉄山の兵糧を焼くと云ふ見込みがあつたらば假かに兵を出して自身に行るのが則ち大將人に依頼する程の事はない是臆病なる事は言葉に絶へて居る船に在つて周瑜威張て居るが陸に上

三 國 志

れば全く河童を陸へ上げたやうなもので貴所の事を河童野郎だと云いました周瑜之を聞て頭から煙を出して怒り周瑜亮を暫らく止めよ我れ人数を出して只今より敵の兵糧を焼て我が水陸の戦かいに長じたる事を知らして孔明の鼻毛を焼て呉れなければならん諸葛亮の人数を出そ事は暫らく止めよと忽ち自ら自身船の用意を致し既に進軍に及ばんとするの有様魯肅又驚ろいたものと見て孔明の船へ參つて右の次第を語ると孔明是を聞いて孔イヤどうも周瑜と云ふ人物は中々正直な者だ夫なれば一ッ行ッて解てやらうと魯肅と共に本陣へ來ッて見ると銀を延べたる鎧黄金を延べたる兜を頂だき劍を横たへ自から軍扇を携さへたる事にして今や船を出さんとする所へ孔明の姿を見せると周瑜大音を揚げて周先生暫らく當所に止まり玉へ我れ河童同様の大将にして水に在つての働らさ

三 國 志

は出來るが陸に在つては出來んと云ふ仰せ如何にも殘念俾り
あがら周瑜海陸の戦かいに長じたる所をお知らせ申さん只今
敵の兵糧を焼てお見せ申す暫らく是に止まり玉へ早々に船を
出せと下知を傳へたる時に諸葛亮孔明先づ待ち玉へ都督何ゆ
ゑあつて右やうに怒り玉うぞ只今魯肅に對して申したる事は
孔明が申さんとは云はんが先づ左様に怒り玉うな失禮ながら
周都督は勝に乗て戦さをするのみにして前後を顧みざる人と
見へる周前後を顧みざるとは孔明固より魏の曹操は少身よ
り出で只今は相丞の位ぬに即き天子を盾として勅命を旨と
し諸國へ兵を出せ位ぬの者河北の袁紹を討ちしは前進べたる
通り兵糧を焼て大功を奏したり敵の兵糧を焼て其戦かいに利
を得たる者が何とて迂濶くど聚鉄山の如き所に兵糧を積ん
で置るか計略なる事を御存じないか表面には聚鉄山に兵糧を

三 國 志

積むと披露致し實は人の知らざ所に圍まひ置き敵の來るを
待つて事をしやうと云ふ一樣尋常の大將ではあひ來鉄山に兵
糧ありと思つて濫りに兵を出さんとするは其前後を顧みざる
人あらずや先づ大都督暫らく止まり玉へ今日に限らむ日を追
て曹操の兵糧を焼くは斯申する孔明暫つて致す只今魯肅に對
し魯公を罵しり惡口を述べたるは濫りに兵を出さんやうに足
を止めるの心あつて致した事であると滔々述べたる時に流石
の周瑜も思はず持つたる軍扇を取落し周成程孔明の云ふ通
り敵の兵糧を焼て其戦さに利を得たる曹操が何しに兵糧を乗
鉄山の如き所に置るか夫を心注かき血氣の勇に逸まるは某が
しの過り實に恐れ入つたと孔明の手を取り上坐に案内を致す
孔明先生何卒此上ども某がしに落度あれば能きに諭し玉へ誠と
に只今の一言を承たまはり大いある徳を得たりと周瑜も流石

三 國 志

は大将悉く孔明の名智ある事に驚ろき側に居りましたる
魯肅も副都督程普其他の人々に於ても只孔明と云ふ人の志
しに感じ其儘孔明は別れを告げて我が船へ歸りました跡に
りて周瑜に於ては孔明の名智あるに感されば感ずる程此者
生け置かば我が國に害をなすものぞうがなして亡き者に
と思つて居りまする茲にお話し別れて江夏に居りまする劉備
玄德に於ては孔明に別れて其心配一方ならず手廻りの同勢と
卒つて一度樊口と云ふ所まで來りまする

第七席

茲に劉備玄德は孔明を呉の國へ遣はしまして其の後何の便り
もなく何日まで待てども安否が分りませんから悉く胸を
痛め呉には兄の諸葛瑾といふ者が奉職して居るから萬一兄の
言葉に心變つて呉の國に留まるやうな事ではいか外に何か

三 國 志

出来事でもありはせぬか夫とも孔明の智を嫉んで彼を憎む者
でもあつて落命をいたしはせぬかと心痛をして居りましたが
何日まで斯く心配をして居ても詮ない事と思召し江夏に居り
まゐる劉琦に別れて暫時孔明の様子を尋ねたく思ふから江南
の方へ参つて様子を尋ねやうといふと此の時に劉琦 劉夫は
お留守りなまつた方が宜しうございませう孔明は人手に罹つ
て往生をするやうな人物ではあし又兄の諸葛瑾が何を申して
も夫に應じて呉に留まるといふやうな心底はあいと心得ます
るから將軍能く御出でになるほどの事もございませぬとい
へども劉備は何分心に掛りますから無理に劉琦に別れを告
げ尤も多くの人数を連れて行く譯ではない漸々手勢三百人
ばかりを連れて樊口といふ處まで参りました、スルト正面に曹
操の海軍に於ては充分其處に備え船陣を張つて居りまする様

子又向ふを見れば這は開も如何に吳の水軍が充分手配を立つて居るから、ア、ソレ見れば時に違はせ吳の孫權は彌よ怒つて曹操を對手に戦かひをするものか、さすれば孔明は此の中に居るに相違ないと思ひました自分夫へ乗込んで行く譯に往きませんから誰か吳の方へ遣はして様子を探ねやうと思ひ、ソコで使いの者を撰ぶ世の中に戦争の使位ぬ難かしいものはあゝ通常の知合の處へ行つて是れくの事をいつて來い、其こまりましたト、夫だけに行くなれば誰でも宜いが謂は敵同様にあつて居る處へ孔明を探ねて行くのだ一ツ間違へは己れの命をも失ふやうな事があるから是は尋常の者では往けぬ、誰にしやうかと思召した處が張飛が夫へ進んで張某がしをどうぞお遣はしを願うといふと傍はらから趙雲進み出で、趙イヤ斯様事某がしに仰せ附けられたいといへども諸葛亮

先生の安否を探ねて参らうといふには趙雲では往かぬ張飛でも性短氣であるから往かす此の時玄德四邊を見ると幸はひにして糜竺が夫に居りまして糜竺恐れながら申上げます某がしへ此の御使ひを仰せ附けられたく願う、玄ア、糜竺宜い處へ申した手も其方をと心得て居つた依つて是より吳の國へ参つて孔明の様子を探ねるやういたせ併し多人數を連れて参つては却つて敵に疑がひを掛けるから糜竺エ摸一人を連れて小船を浮べて参つて亮先生の様子を探ねる心算でございませ、其の心おれば仔細ないソコで糜竺は粗末なる服を着用して別段に鎧を着け兜を被るといふでもなく平服を着けて一人の僕を従がへ吳の國へ参つて江を渡り既に吳の水軍近くあると何時曹操の兵が此の所へ來るも知れませんから充分に警戒を加へて居りましたが怪しき船と心得怒まら番船二三艘夫へ來つ

三 國 志

て ○夫へ來つたる船は何者にて何れから何れへ通るものか
糜竺は船に立上り 糜某がしは劉備玄德の家來糜竺と申る
者主人の命を受けて軍師諸葛孔明に面會をいたしに參つた
○ア、然らば其許が何か玄德の家來て夫に扣えて居あさるつ
うに船を待たして置いて番船は引返し早速右の次第を一番
船に居りまする黄蓋韓當に呉げましたゆゑ兩名叮嚀に案内を
するやうにといふので、番船再び夫へ來つて案内をいたしま
そるから糜竺恐れ氣もなく黄蓋韓當の船に乘込み一様の挨拶
をいたし 黄某がしは黄蓋此處に居るは韓當といふ者不肖か
がら此度先驛の役を仰せ附けられ第一番の船に扣えて居る只
今より本陣へ案内をいたす大都督周瑜に面會をして孔明の機
子をお尋ねになつたら宜しからう 糜竺然らば軍師孔明は此所
に居られますか 黄何處に居るか我々供は細やかな事は知ら

三 國 志

ん 糜尤ともござる然らば何れへなりとも御案内に従がつ
て參らう兩名直ちに本陣へ案内をいたし大都督周瑜の黄蓋韓
當より右の次第を申しまそると周瑜 周ア、苦しうない早速
是へといふので糜竺を其の前へ案内をいたしました糜竺を
施こし 糜是は周郎督にて候か初めて面會をいたす手前は糜
竺と申る者此度主人玄德の命に依つて軍師孔明に用あつて
罷り越したり願はくば大都督の指圖に預かり孔明に對面の叶
ひまそるやう取計らひを願ひまそる 周開及んだる糜竺とは
其許なるか不肖此度大都督の任に當り曹操百万の兵を敵とし
て戦かいをなす事最早近きに有り諸葛亮先生も當國へ來り辱
々將軍の前に於て軍事を説き能く兵士を語り誠に我國の爲に
預つて力あり早速に孔明へ對面の義を取計らうべきであるが
併し今日は何分にも孔明を是へ案内をそる譯に往かんといふ

三 國 志

のは矢張會議堂にあつて文官武官の會議をいたして居り諸君
先生も夫に連まつて居るゆへ夫へ案内をする處にはあらんに
依つて斯うされては如何只今より船を戻し樊口の地に居られ
る處の劉備將軍を是へ案内をして貰ひたい 糜ハ、ア主人玄
徳を是へ伴ひますか 周如何にも併し是へ迎へたればとて
別段に我れ劉備に對して野心あるに非ず孔明先生の言葉を守
つて茲に相合して曹操を討たん事を計る是は争公が委しくは
御存じあるまいが孔明先生が能く承知いたして居る處幸はい
に是へ劉備將軍を御案内下されれば某がし曹操を破るの計畧を
語り茲に相合して事をいたすに於ては曹操百万の勢ありとい
へども是を破る事最と易し願はくば此の所へ劉將軍を御案内
下されたい我れ今日まで面會する事を得て環て英名天下に轟
ろく中山靖王の後胤にして漢の憲帝の末裔たる容易ならざる

三 國 志

御方是へ御案内を下されば千萬忝じけなく存する 糜夫はと
うも何よりの事糜笠懸へ懸り越したる甲斐もありさういふ事
なれば孔明に面會をするは第二にして先づ第一に主人玄徳を
是へ案内いたすでござらうと糜笠懸こんで直ぐに用意をして
其儘小舟を戻し樊口に留まつて居りまゐる玄徳の許へ歸り此
方は魯肅始終の様子を側に聞いて居りましたが大都督の側へ
來りまして魯都督何故あつて是へ劉備を招かんとは仰せ
られたるか某がし都督の志ざしを察するに是へ玄徳を招いて
僞はつて彼を害するの思召しでござらう 周如何にも左様だ
魯夫はとやうも怪しからん劉備に如何なる罪あり如何ある怨み
あつて彼を是へ招いて討玉ふといふか何故左ばかりに彼を憎
み玉ふか 周イヤ某がし此の國を思ふの念少しも止まき曾て
孔明を失ふい吳の國の憂いを拂はんとしたる事二度に及ぶ

三 國 志

と雖も討つ能は今是へ劉備玄德の來るを幸はいなり茲に玄
徳を殺さば其の根を切つて技葉の枯るゝやうなもので孔明も
自づから我れに従かうか假令従がはざるにもせよ彼を討つに
甚はだ易し魯夫は周都督宜しくおの罪なき玄德を討つて
ば必らず世の誹りを受けるに相違なし周イヤ苦しうおの斯
く申する周瑜は呉の國を思ふの念深きに依つて國の爲めには
假令如何なる悪名を殘をも如何なる人の笑ひを受けるとも少
しも厭はせ命だに呉の國の爲に捨んとする周瑜なり何とて玄
徳を害す位ゝの事を願みする事のあるべき重ねて其の事に就
は唇を入るゝ勿れと周瑜色を變へて魯肅を睨んだる様子魯肅
も今は何の言葉もあく自分には悪名を受けるとも人に笑はるゝと
も國を想ふの志ざし深きに依つて更に厭はないといふ事を以
いて見ればどうも留める譯にもありません其口を閉ぢまし

三 國 志

た此の時に周瑜は船の内に扣えて居ります五十人の兵士是
は力勝れたる者のみにして兵士といふ條多くの者より撰拔を
いたしたる者は幕の内に隠して置き周汝等帷幕の内に隠
れて居て密かに我が舉動を見よ今に見られよ玄德來らば早速
に酒宴を催はし酒半に及んで我が持てる盃を投げるを合圖に
汝等飛掛つて玄德を討つべし ○委細長あまらずした 周我
が盃を投げるに能く眼を止めよ五十人の兵士委細長こま
りましたと玄德の來ない内に幕の中に隠れて待つて居ります
る、お話し別れて此方は糜竺早速に船を戻し笑口といふ處へ來
て主人に面會をいたし玄德は糜竺の様子を見るとき笑を含んで
夫へ参りました 玄如何に糜竺孔明に面會をいたしたか 糜
未だ諸葛亮先生には對面をいたしません 玄何で戻つて來た
糜實は云々斯様く の譯でございます 玄ウム 糜どうも呉

三 國 志

の國の周瑜といふ人物は中々の豪傑にて此度孔明先生の言葉
に從がひ將軍と合一致し計略を全しうして曹操を討たんと思
ふからどうぞ打合せの爲に是へ案内をして呉れろといふので
ございませす是より早速周瑜の本陣へお出でにあり尙人數を出
して曹操を討つ事の御相談におつたらば宜しうございませう
其の節は必ら先亮先生にも御面會を遊ばす事が出来ませう
玄夫は何より然らば急ぎ舟の用意をいたせ早速に周瑜の本陣
へ参り面會の上萬事を物語りいたさんといへる人簡暫ら
まそる時に片邊に扣ゑて居りました簡暫といへる人簡暫ら
く御扣ゑ下さい御尤もには候得共併し少しく心配の發もご
さいませるからどうか御出陣は御見合せを願いたい 玄イヤ
さうではあろうけれど折角に此の槩笠が約束をいたして來
たるのを周瑜の本陣へ私が行かなければ何か周瑜の勢はひに

三 國 志

恐れて行かんとでも思はれてはあらんから一寸行つて参らう
只に周瑜に面會をそるばかりではあく、一つには孔明にも面會
が出来来るから、簡暫も仕方なく口を閉づる、片邊に扣ゑたる張飛
びませんと簡暫も仕方なく口を閉づる、片邊に扣ゑたる張飛
張飛はくば此度の御供を某がしに仰せ附られたい、若し又周瑜
心得違ぬをして君を討たんとおすど雖も我れ丈八の蛇矛を
持つて御側にあるからには何の恐るゝ事もござらん 趙イヤ
今日の御供には斯く申す常山の趙雲に仰せ附けられたい、我
れ槍を以つて御供をそるに於ては悼かりながら周瑜如何ある
無禮を加うるも決して君の御尊体に過まちなし 玄イヤ
又初まつたな此の時に傍らに扣ゑて居りましたる處の關羽
關イヤ、御身等は此度は留まつて人數を守るやうに君の御
供は斯く申す關羽がいたを、進み出でたる時に玄徳之を見

三 國 志

て 玄 如 何 にも 此 度 の 供 養 は 雲 長 に 申 附 け る ゆ え 左 様 心 得 る 人
 數 は 三 十 人 も あ れ ば 宜 い 別 段 に 戦 争 を し に 往 く 譯 だ も 亦 け れ
 ば 多 人 數 を 召 連 れ て 參 っ て は 却 っ て 周 瑜 に 恐 る べ し 當 る べ かり
 少 人 數 に て 罷 り 越 そ に 依 っ て 早 く 支 度 を いた せ 關 羽 之 れ を 聞
 い て 關 如 何 にも 夫 れ が 宜 し う ござ い ます 某 が し 不 肖 に は 候
 得 共 必 然 君 の 尊 体 を 守 護 し 奉 じ ます 仰 へ 御 心 安 く 存 せ せ ら
 れ る や う に い ふ を 聞 い て 張 飛 趙 雲 此 の 時 に 何 ぞ とい ふ と 赤
 面 が 出 る ん で ぞ う も 往 け ぬ 兄 貴 が 居 る 内 は 任 途 が 思 ふ や う
 を 働 け ら せ ば 出 來 ぬ 事 を 關 羽 が 死 ん で 終 へ ば 宜 い と 詰 ら ん 事
 を い つ て 居 る 直 ぐ に 船 の 用 意 を せ る 儘 か 三 十 人 の 兵 士 を 從 へ
 へ 四 艘 の 船 を 浮 べ ま して 江 を 渡 っ て 參 り 吳 の 船 陣 に 近 附 け
 たる 時 再 び 其 處 へ 迎 ひ の 船 を 出 した ま して 大 切 に 扱 かい 周 都
 督 の 元 船 へ 案 内 を いた す 時 に 周 瑜 は 今 日 こ そ 即 ち 玄 徳 を 殺

欠

MISSING

三 國 志

る事能は老周瑜といふ若は國を想ふの念深き忠臣にして己れ
 が悪名を受けたる事を願ひ其の國を奪はれん事を恐れて將軍
 を害せんとするの念あり然るに關羽充分に將軍を守護された
 るが爲めに周瑜其の手を下す事能はざりしは誠に幸はひ實に
 危うき事にてあつたり重ねて必ら當地に來り玉ふ事勿れ
 玄、ウム先生には何日頃歸られるや孔然れば我れ思ふ事あり
 來十一月二十日午後に至れば必ら或るべし玄ハ、ア來
 月二十日といふ事を定められるか孔然れば來月二十日東南
 の方に當り必ら吹起る事あり其の東南の風の吹初めたる
 節に必らず趙雲に少勢ありとも授け船の用意をして南の岸に
 渡らそべし是を聞いて玄徳少しく驚ろき十一月二十日に東南
 の風が吹起る事を何として前月に孔明は知つて居るかと思つ
 たが固より七星壇に風を禱る位らゐの人でございますから

孔明必らず其の見込があるに相違ございませぬ、玄德大いに
を冷まして其の儘樊口へ歸る、話し別れて曹操の許よりして
再び周瑜の許へ對して書翰か來りたり、此の時に周瑜右の書
翰を開かずして是れを破り、尙其の使ひを切りたるが故に曹
怒つて俄かに進軍をいたし茲に初めて合戦を開く一條に相成
ります、

第九席

劉備玄德は孔明に別れて樊口へ立歸りました、扱魯肅は内々周
瑜に面會をいたして魯周都督は此度の大任を帯びて此上も
あき御人であるが大いに言葉の相違するは怪しからん事であ
る、といはれたる時に周瑜色を變へて周魯肅は何で某がし
言葉に相違があるといふか魯イヤ某がし屋々意見をそるを
都督は聞かず今日玄德を呼んで彼を討つに於ては孔明は其の

枝葉ありと帷幕の内に五十人の兵士を伏せて置きながら今日
に至つて其の事もさ空しく害せきして歸したるは如何な
るゆゑなるか其位めあれば何故に某がしが見をいたしたる
をお用ぬなかりしかと詰問されて周瑜頭を抱ふ少しく形を改
ため周イヤ是はどうも魯肅其の一言何の申歸もない我れ素
より吳の國を思ふが爲に劉備を討たんとして今日の計略を用
ひたる處彼少しも油断なく第一玄德の後ろに關羽青龍刀を持
て我れを睨み其の顔色常からせ我れ若し盃を投げて大勢の兵
士是へ現はれ玄德を討たんとする時は其の前に關羽の爲めに
我が首を討たれんかと思ひ夫に依つて其の計略を用ぬ魯肅
の言葉を蒙りつて甚はだ恐縮いたす魯肅是を聞いて打笑ひ
魯イヤ左る事も候らばん只今都督に對し申上げたる言葉の過
ぎたるは許し玉へ世に恐るべきは關羽にして彼れ玄德を守護

三 國 志

して油断なく八方に眼を配りたる様子、我々劍に居りながら關羽一人の爲めに壓せられ席上に人なき如く四百餘州廣しと雖も、二人赤き豪傑は實に關羽と申す者なりと悉く二人關羽を賞め、何時如何なる事があるやも計られず然れば番兵を出し、斥候の船を出して様子を見て居ると四五日経つて曹操の方より永江全筈といふ兩名書翰を持参いたし、申して周都督に面會をして是を渡したしと第一の船へ來つて申し、申したゆゑ早速に其の由を通じ、申すると周瑜、敵の大將よりして使者を送りしは如何なる事であるかと思ひましたるから相當に手續きをして早速其の元船に案内をいたし、申した正面の椅子には周瑜扣へ左右には文官武官の人々何れも居並んで居ります、處へ四五名の者に案内をされて永江全筈といふ兩名夫へ進み禮を施こ

三 國 志

し周瑜より禮を返す此の時に永江言葉を改ためて曰く、永我が大將よりして周都督へ参らする書面を持参したり、顯はくば都督是に對する返翰を賜はらば我々共兩人使ひを全たうし、面自を施こし、申す周瑜早速に其書翰を手に取り上げて見ると其の上書に、漢大相丞周都督と認めためてあり、申す其の上書を見るや、忽ちちの間に驍サワくと動き、兩眼に血を注ぎ、右の唇を輪を開き、我れへ對し、斯の如き書翰を送るとは如何に漢大無禮なる曹賊我れへ對し、斯の如き書翰を送るとは如何に漢大相丞付周都督とは何事なるや、我れは彼の臣にあらず、不肖なりと雖も、江東六郡八十餘州の主たる呉の孫權の臣にして、大都督の任を帯ぶる者なり、夫へ對し、斯の如き無禮の書を寄るといふは此の上もなき不届なり、誰かある是へ來つて其の使ひ兩人の首を拂へど、悉く怒つたる様子、兩名眞青にあつて何と答

三 國 志

ふる術も知らず前後には周瑜の家來大勢扣いて居りまそるか
ら逃げる事もあらざ其内に大勢にて遂々彼の兩名を其所へ引
据え首を討たんとする時に魯肅早速に罷り出で魯先づ都
督暫らく待ち玉へ昔しよりして陣中の使ひを切るといふは勇
士のあす業にゆらき若し斯様ある速まつたる事を仕玉ふに於
ては如何ある誹難を蒙るも計られぬ周黙らつしやい都督
周瑜のいたする事を汝等漫りに隊を入るゝに及ばん速やかに
兩名の首を刎ろハッといつて魯肅も是非に及ばんから其使
へ退る其内に家來の者は兩名を引いて其の席を退り頓て二ツ
の首を切て其處へ差出しました周瑜は彼の兩名が従がへ参つ
たる部下の者に對し周汝等立歸つて曹操に告よ斯の如き無
禮の書を送るは速やかに我れに向つて開戦を挑むの心底あら
ん早々此の首を持つて立歸り何時寄來るとも周瑜一戦にして

三 國 志

塵ろしにせんと息巻荒く罵つたり其の勢はひに恐れて曹操
の使いに従がひ参りたる者はブルク慄るあがら兩名の首を
持つて其の船を引返し右の次第を早速に曹操に物語りをする
と此の時に曹操火の如くにおつて怒り曹操といへる曲者
は不屈至極の奴あり我れ彼の書面を送るに就て無禮の舉動を
おしたる覺えおし我れ彼の大相面なるを以て其の如くに書面
を認めたるに彼れ是を怒つて開封もせせ引捌き其上に使節兩
名を切るといふは彼れ軍法を知らざる者ありイテや其の儀な
れは少しも猶豫いたす場合でない速かに出陣の用意をいたせ
と早速に水軍の都督蔡瑁張允に申附けたる事ゆゑ兩名心得て
其日の内に支度を遂げたる事にして愈よ人數を出すといふ事
にありました時に建安十三年十一月朔日早朝より七百餘艘の
艦は忽ち三江の浪を蹴立つたる事にして周瑜の船陣を差し

三 國 志

て乗込んで來る此の時周瑜に於ては豫て使ひを斬るから
曹操怒つて兵を出すに相違なしと心得自分等に於ても船陣の
用意を充分になし先手の大將を甘寧とし左備は韓當右手備
ゑは蔣欽に命じ百三十餘艘の船を雁行に造つたる事にして敵
の來るを待受けたり敵の大將蔡瑁といへるは元荆州にあつて
永らく水軍を掌どつたる者おれば船を扱かう事己れの手足を
動かすより尙早く忽ちの間に夫れへ來り鉦を鳴し鼓を打つ
たる事にして互ひに其の船を間近く寄せ半日或は石火矢の
用意をなし船を東西に乘廻そ其の働らきは物凄き有様あり吳
の水軍の先鋒の役を吩附つたる甘寧も固より拔群の勇士にし
て頻りに船を南北東西に乘廻し乘違へ敵の船許へ乘込みます
る様子暫らくの間激戦に相成つたり然る處が此の大都督の下
知宜しきを得たると見え見るく間に七百餘艘の船は發の如

三 國 志

くに打なされ悉ごとく敗走をいたす様子陸にあつて曹操是
を聞いて大ひに怒りソレをいつて下知を傳へ跡の船を出し
て是を助けんとあすも雖も中々助かりません既に破れて參
りまするや兵士等周章狼狽をいたし自分と水中に落入り相果
てまするやうか譯でございまして是は前申を通り北國侍でと
ざいまするから水に馴れません陸地の戦かひに山嶽を駈廻り
まする時には實に猿の如く馬を自由自在に動かしまするけれ
ども船戦争に至つては誠に馴れません然ればにや船が動けば
同じやうに身体を動かさじく大きな浪でも來ると夫が爲め
に船の中に倒れ捨で病人の如くに相成りまするから永く其の
戦かひに堪られる譯はございません此方は充分船戦争には馴
れて居りますから少しも恐るゝ處はあい益々激しく攻掛け
るに依つて終に曹操の軍勢は散々に敗走をいたしました此の

三 國 志

時蔡瑁の舎弟蔡薫といふ者船六艘の用意をして夫に進んで大
音を揚げたる事にして薫敵の大將周瑜を討取るは今日にあ
り進めくしと乗出す流石は都督蔡瑁の舎弟だけあつて蔡薫は
▲の働らきは美事とさういふも夫に附て居りまゝる者は名々
荆州にあつたる兵にして水軍に馴れたる人々でありまゝるか
ら其の働らきも中々美事とさういふも呉の甘寧此の様子を見
るより船の真正中へ突立上り弓に矢を番へたる事にしてヒヨ
一フツと切つて放てば過また其の矢蔡薫の咽喉に當つたり
何ぞ以つて堪るべき只一矢の爲に水中に陥つたり蔡薫既に討
たれたれば部下の者一同大いに驚ろき早速に其の船を返して
引上げました尙是より屢々戦争のお話しがございませうが是
は小戦でございませうから大畧をいたしましませう今この時間
いたして三時間ほどの船戦争愈よ周瑜の方が勝戦争になつた

三 國 志

から鉦を鳴して船を一旦引上げ敵は道々の体で引取りました
様子でございませう初めの戦かひに周瑜に於ては充分の勝を
して分捕の船も數多あり従がつて生捕つたる者も多ござい
ます然れば周瑜は忽ちちの間に旗を立て勝鬨を揚げ早速に
右の次第を討虜將軍孫權の許に對して注進をいたしました孫
權大いに喜び第一番の戦かひに敵を數多討取り多くの船を
分捕にいたしたるは喜こばしき事であると悉こく周瑜以下
大將分の働らきを賞め尙愈よ勇を奮ひ呉れるやうにと厚き言
葉を下し置れました是に引替へて曹操は蔡瑁張允の兩名を本
陣に招いで曹汝等兩人重き役を帯びながら何故あつて敵の
少勢の爲に斯る破れを取つたるか申譯あらば速やかにいたせ
とらじや次第に依れば汝等兩人の首は其場に討落そぞと曹操
劔を取つて夫へ進んだり蔡瑁此の様子を見て 蔡相面暫らく

三 國 志

待玉へ御怒り去る事には候へども今日の敗軍敢て某がしが下
知の届かざるに非ぞ申譯には似たりと雖も北國侍にして船
を嫌う兵士多くあるがゆゑ夫が爲めに敵の矢彈に驚ろき又船
の動くに驚ろいて已れの身体さへも自由になす事能はず然れ
ば敵に向つて矢を放つ事もならざる者多く夫に反し敵は最
も船戦に熟練なしたる者なれば終に斯の如き敗走を遂げた
る次第此儘に我々が首を刎ねらるゝは是非に及ばぬ事ながら
先づ暫らく許し玉へ今一戦いたして又斯の如き破れを取つた
る其時こそ如何ある處刑を受けると雖も必らき恨みとは存
じ奉つらば張允も言葉添えて張何卒今一度我々にお任せ
に預りたい此度こそは周瑜を生捕にいたして御覽に入れませ
曹汝等夫程に申すなれば今日許す早速に周瑜を生捕るの
第をいたせ先づ我が見る前に於て陣立をいたして見せよ 兩

三 國 志

人畏こまつて候と蔡瑁張允も其儘にして本陣を退り自分の元
船に至りソコテ蔡瑁に於ては俄かに水中に柵を構へ二十四座
の水陣を造り城廓の如くに備えを立てました陸に備へを立て
るよりは船の備えといふものは中々六かしい蔡瑁は永らく水
軍を掌り居りましてゆへ船陣を造る事は頗る上手でござ
いませる今日初めて戦争に負けたからといつて生涯負ける
といふ譯もかいぞ今度こそ勝戦をして曹操の機嫌を取返
したいものだと充分に其の用意をいたしました曹操高きにあ
つて其の船陣を見て手を打ちて喜こび曹蔡瑁初めての戦か
いに敗れを取りたりと雖も彼は適ばれ水軍に鍛練の者だ此
位めに船陣を立てればモッ破れる事はあるまい是なれば周瑜
を破る事四五日の内にありと大きに喜こび夕陽に相成ると
ン 簿を焚く其の簿も五ヶ所や八ヶ所ではございません夫

三 國 志

だけの船陣がもう残らざるを焚くのであるから九で焚口の邊
りまでも真晝の如く周瑜は是を遙に見て 周彼今日の戦ひに
負けたるを残念に心得戦争の仕返しをいたさんとするかど
らに上つて見れば悉く船陣を造つたる様子、けれども充分
には相分りませぬから早速に船の用意をして 周敵陣に近附
いて如何なる陣立をいたしたるか船陣の様子を探るであらう
黄蓋同船をさつしやるやうに魯肅も來さつしやい彼の處へ行
つて船陣の様子を見て來やうから魯肅暫らく首を曲げて居た
が魯都督易々と敵の船陣と近附き玉ふは危うい其許は大將
である大將が心易く敵陣近く參つては萬一の事がある時には
容易ならん大事だ 周イヤ魯肅決して心配には及ばん敵は
如何ある船陣を造つたか近附いて見て參いるから同船をさつ
しやい 魯都督の仰せであるから許みはいたさんからとソコ

三 國 志

て黄蓋魯肅の二人も船に乗つて酒肴の用意をして樂器等を携
さへ一ばい飲みながら船陣を見に行かうといつたるが誠に氣
樂なものだ忽ち先方の船近くへ周瑜船を進め餘外ながら見
ると二十四座に船陣を造り箇所へ周瑜船を進め餘外ながら見
事一の城廓に如しい周瑜思はず盃を夫へ落し 周ハテ十是は
油斷が出来ん誰か斯ういふ船陣を拵らへたか尋常の者では此
の二十四座の船陣だが布く者はあいがと考がへると側に居り
ました黄蓋 黄都督暫らく考がへてお在てなさるやうだが何
も考がへる事はあいな此の位ぬに船陣を布くは尋常だ 周ウ
ン曹操は北國に育つて能く船の事は知らんと考がへて居つた
が……黄都督は固より船の事は存せんが豫て降參あしたる
荆州の者は多く▲に馴れて居る取別けて此度水軍の都督に相
成りたる蔡瑁張允は最も水軍の事に馴れて居り此者等が陣

三 國 志

を据えたとに相違ない彼は中々の者であるから都督能く心
を注げ玉はんと大いある過まをを生ずる事がある 周成程は
うだらう我れ曹操を倒さんとするには先づ此の水軍を破らな
ければならん此の水軍を破るには蔡瑁張允の二人を失はん
ければならんといつたが忽ち心の内に計畧を定め 周コレ
其處へ鎬を下ろせと命じたから一同の者は驚ろき此の場に至
つて若し敵の船に追駈けられたる時に碇を下ろして居ては容
易に走る事が出来んといふ譯であるかと思ひ躊躇いたして
居るのを 周何れも恐れる事はなから速やかに碇を下ろせと
終に其處へ船を留め僅か二十四五人しらす這入つて居る船の
中で酒を飲み蛇皮線月琴などを弾いて騒ぎ出したスル是を
早くも番兵認めめて其の次第を張允に注進をしたから扱は彼の
船の内にも周瑜が居るに相違ない周瑜を生捕るは此時にありソ

三 國 志

レ進めといつて忽ちちの間に蔡瑁張允の二人を下知を傳へ
て三四十艘の船をサーツサツと捕して船に下知を傳へ
様子幾ら強嘴の周瑜でも是を見ると 周ア、来た、ソレッ
といふと忽ち碇を上げてドン、逃げる、何れも驚ろいて逃
げる位あれば何も斯んな處へ碇を下して休んで居ないでも
宜さうなものだと思つたが都督のいふ事であるから其の通り
にして居ると周瑜は逃げながら酒を飲んで進め、と下知を
傳へるに依つて、ハテ變だ逃げろといふから逃げれば進め、
といふのはさういふ譯だかと思ふと、我が本陣へ進め、是ぢや
ア矢ッ張逃げぬのだと漸々の事で周瑜の船は我が本陣へ逃歸
つて参りましたしたゆゑ遂々敵の船は追駈けて来る事は出来ず殘
念ながら元へ潛戻しました、周瑜に於ては危うきを免れて一時
逃歸りましたが此方は曹操さうかして此の周瑜を生捕にした

いものだと思ひまする時に操曹の傍に扣えて居りました蔣幹
 宇は子翼といふ者が計略を廻らし自から周瑜の本陣へ至る周
 瑜却つて翼幹子翼を救むいて蔡瑁張允の兩名の首を縛させる
 の一條

第十席

曹操本陣にあつて會議をなした、さうも周瑜といふ人物は強
 あり殊に又水軍を能く指揮する事を存じて居る我れ呉の國を
 握らんとするには彼を失なうこそ肝腎なり、日あらずして大方
 江夏にある處の玄德、呉の孫權と共同して孔明計略を授け如何
 ある事を爲すやも知れ早く呉の國を倒さんければならんが
 夫に就ても周瑜を説くか但しは彼を首となす者は此度の戦功
 第一となすと申しました時に傍に扣えて居りました蔣幹、宇は
 子翼、此の者が進み出でまして、蔣、イヤ大將暫らく御猶豫に預

かりたい、周瑜を倒す事は某がしが勤めて御覽に入れやう
 曹、ア、蔣幹、何か周瑜を倒すの計略があるか、蔣、然れば腕前を
 以つては彼に及びませんけれども彼とは朋友でございまして
 手前も元、呉に生れたもので同學校にあり至つて親しくした學
 友でございまして、今日某がし君の手許に御奉公をいたして居る
 事をまだ周瑜は存じませぬ、依つて偽はつて周瑜の陣に至り
 必ら走彼を討つて御覽に入れる、曹、イヤ夫は宜い所へ氣が附
 いた、充分に勤めて呉れるやうに、蔣、委細、段こまりましたと蔣
 幹、早速曹操の本陣を退り其の翌日美服を着用なし大いある瓢
 を携さへ、十四五才にある童子を一人連れて一艘の小船に乗つ
 て江を渡つて呉の水寨に近附いて参りました、スルと船陣より
 七八名の番兵、夫へ出て参りまして、〇何處へ行かれる、蔣、手
 前は元、呉の生れの者で蔣幹と申しませぬ、當時行脚の身でござる

三 國 志

が今般學友の周瑜惣大將たる事を承知して喜こびを陳べやう
と心得江を越えて参りました決して怪しい者ではございませ
ん宜しく都督へお取次を願いたい見ると大きな瓢に酒などを
入れたのを携さへて居る其の氣樂さ早速右の次第を周瑜に告
げる周瑜是を聞いて 周十ニ子翼が来たど早速此方へ通を
うにと大將の命でございませから其の趣むきを取次ぎ岸へ
船を留めて童子を其處に残して置いて瓢箪を持つて大勢軍人
の扣えて居る中を事どもせき子翼與へ通りませする是を見て周
瑜左も喜こびしけに 周イヤどうしたエ蔣幹十何年と面會を
いたさんお蔣イヤ都督誠に此度は夥だしき出世をせられ結
構であつた手前も一ツ學校にわつて互ひに勉勵をせると雖ど
も某がしは未だ其の學問も勝れず殊に不才にして世の中に立
つ事も出来んから只由願はわつて清風残月を樂しまうと思つ

三 國 志

て居た處君は今日幸はひにして水軍の報喜になり此度は曹
を對手に戦かひをするといふ事を承知して近傍に参つて居
ゆゑ喜こびに罷り越した 周夫は千萬忝じけふい某がしも
時孫將軍より命令を受けて斯様に戦かひをいたして居るが蔣
幹是までの様子を聞かされたか 蔣然れば初めの戦争に多く
の者を討取り又は生捕にかし實にどうも意外の大功を現はし
たといふ事を聞いて参つた是は失禮だが私の飲残しの酒であ
るが昔しを思い持参いたした酒ゆゑ都督是を快よく味はひ玉
へど瓢の酒を出す 周是は忝じけふいと周瑜は其の酒を飲
み又陣中に酒肴の用意もしてございませから酒肴を取出し
て蔣幹を待遇して居りませる内に蔣幹は酩酊をして歌あを
唄つて居る一同の者驚ろいて何といふ野郎だらう陣中で大き
な聲を出して歌などを唄う奴もあいののだと思つて居ります

三 國 志

る其内に周瑜も大分に酩酊をいたし 周時に蔣幹是から何れ
へ趣むかれる 蔣私は何れといつて宿るべき處もあなければ
も此の北の岸に聊さかの村がある其處へ參つて手習いの指南
でもしやうと思ふので 周左様か先づ久々であるから今宵は
當陣へ一泊したら宜からう 蔣どうも本陣へ一泊するといふ
も如何であるか 周何の大將の本陣であつた處が苦しうあ
今宵は一泊をして互いに昔しを語らう 蔣夫は忝じけない併
し昔しとは違ひ今日は都督の位にある處の尊公…… 周イヤ
決して昔しの事を語るに都督では往かん周瑜といふて貴いた
い 蔣ウム然らば失禮ぢやが周瑜學校に居る時に那の入口の
飯屋へ二人で這入つた事があつたッけな 周さう…… 向
ふに居た黄蓋等の人は是を聞いて何だい那れは全体陣中へ
来て下らない事をいつて居る奴だと呆れて見て居りまする内

三 國 志

に周瑜は 周「サア」此方へ來玉へ蔣幹子翼の手を取つて
向ふに設けてございます軍議の秘密室へ案内をいたしまし
た黄蓋大いに驚ろいて周瑜の手を掴へて 黄蓋はシタリ如何
に酔うたればとて其處は漫りに人を入れべき處でない飯令都
督が親友にもいたせ漫りに秘密室へ案内をいたしては宜しく
ござるまい 周拾置かつしやい飯令秘密室であらうとも周瑜
が許そ分には仔細かいサア 蔣幹此方へ來さつしやいと黄
蓋の留めるをも聞かず蔣幹の手を取つて其の室へ案内をいた
しました 黄蓋は恐れ入つたどうも大將のいふ事で仕方な
いけれども秘密室には夫々の書物もあるし他人を入れべき處
でない全し軍人でもモウ此の室へ這入る人は幾分か身分重
人でなければあらんといふ位ぬの處へ如何に酔うたればとて
周瑜心易く蔣幹を案内して是へ這入るといふは怪しからん人

三 國 志

だど何れも心痛をして居りまゐるのを一向構はせに周瑜は中
に於てさま／＼の昔し話をいたして居りまゐる内に大膽不敵の
周瑜忽ち雷の如き雷を聞いてグ／＼と寐て終つた 蔣都督
は是はシタリ、ア、宜う寐込んで終ひおそつた……周瑜は
々々二三度起したが、グ／＼寐を聞いて居るの幹四邊を見廻
すと卓の上に種々の書翰が積んでございす前申したる通り
秘密室でございませるから種々お物があるスルと其の中に見
馴れた手跡の書翰がございませるから、ハテナと思ひながら蔣都督
翼が周瑜の寐息を窺がみおがらズ、ツと手を伸して卓の上に
ありましたる書面を取上げて見ると、周瑜へ宛てて書出したる
者の名前には我が主人曹操の部下にして、海軍を司とつて居る蔡
瑁張允兩名からの手紙だ、ヒツクツ惹るゐたる蔣都督は何
日の頃にか彼等は周瑜に心を合せて居るか、さういふ事があけ

三 國 志

れば過日の戦かひに那の位に負ける氣支ひがな事には依つ
たら大方半途にして周瑜に味方をいたしたのかも知れん固よ
り彼は荆州の者にして、永く曹操の家臣といふでもあいなから
ういふ事はあらうと思ひ、子翼は周瑜の寐息を伺がいなから茶
理張允等の書翰を密かに懐中をいたし、其儘に出で行かうと思
つたが此奴も中々の強者ゆゑ素知らぬ顔をして元の儘に扣え
て居りまゐす周瑜はグ／＼と空臆を聞いて狸寐入をして居る
狸寐入などいふのは日本ばかりかと思ふと昔しから唐にも
あつた空臆を聞いて居る周瑜俄かに大きな聲を擧げて、周最
早曹操の首は斯く申す周瑜の手に取つたりと呼はつたから
突驚して蔣幹 蔣何だいは……ア、寐言だナ、又少し経つと
周曹操如何に百萬の勢を有すると雖も海軍は何の物かは陸
の暇かいと雖も我れ一度采配を振へば忽ち敵を破り曹操

三 國 志

の首を取る事最と易し併し茶瓊張允の兩人は剛い奴だ……蔣
幹益々驚ろき様子を見ると矢張寐て居る是はどうも大變だ、ど
うしやうかと思つて居る其内に周瑜がバタ／＼手を打つたも
のだから側に居りました蔣幹が 周都督、……オ
、貴公は蔣幹子翼だお 蔣左様 周是はどうも怪しからん先
刻御身と酒を飲んだ事は能く心得て居るが斯様を處に一座を
して居るといふ事は氣が附かあかつたといひながら四邊を見
ると秘密室の事でございますから周瑜色を變へて忽ち蔣
幹の手を引いて 周、どうも斯ういふ處に這入つては往かん、浸
りに他人の這入るべき處でない速やかに出て貰いたいと引張
出すやうにいたしまして、夫へ黄蓋を招き 周御身等夫にあり
ながら何故斯様な秘密室へ這入らうとするのを留めんのだ我
れ一人なれば格別仮令學友たりとも暫らく隔つて居る處の蔣

三 國 志

幹を入れるといふ事はない 黃夫でも都督に意見を加へても
手前のいふ事を御聞なく手を引いてお入れになつたので 周
ウーム夫はどうも剛い事をやつて終つた併し子翼お手前何か
覗きはしさいか 蔣、どういたして 周、那れへ這入つて何か見
はいたさんか讀んだ物があつたらう 蔣、何にも見た物はござ
らん御身が眼つて居る間諜しんで扣へて居つた 周、ウム夫お
れば宜いけれども以來はア、いふ處へ這入つては往かん是か
ら直ぐに席を變へて休みおさるが宜い 蔣、イヤモウ夜明にも
程があるまいから手前は是から戻りませう 周、戻るエ、然らば
戻つても宜いが、どうも飛んだ事をいたしたと大きに周瑜心配
の様子だ、蔣幹子翼は大きに喜こび早速に暇乞ひをして本陣を
離れ豫て岸に繋いで置きました一艘の小舟に童子が相待つて
居りまゐるから夫へ打乗り棹を差して早々に曹操の本陣へ立

歸り、其の様子を見送りながら大都督の周瑜ニツコリ打笑つて
周蔣幹子翼も馬鹿野郎だ、先づ思い通りに参つた必らそや曹操
怒つて蔡瑁張允の二人を殺すに相違ない彼さへ居なければ敵
の水軍に恐れる者は一人もないと周瑜何日の間にか彼の蔡瑁
張允偽手紙を書かして置いたものと見え充分に蔣幹を欺いて
歸り此方は蔣幹早速に曹操の許へ参りまして右の次第を述べて
尙擲さへ來つたる處の彼の書面を差出しまして右の次第を述べて
を開いて見ると、其の文に
某等降操非圖仕祿皆勢迫耳今已賺北軍困於寨中但得其便即
將曹賊之首獻于麾下早晚人到便有回報謹此敬覆希冀照察
曹操大いに怒つて終に夜の明けさる内に蔡瑁張允を引出して
其の首を斬るといふの一條から彼の諸葛孔明が名代の矢以
りのお話しに相成りまほ。

第十一席

蔣幹は終に周瑜の秘密室に這入つて船手の大将蔡瑁張允の密
書を得て立歸り直ぐに曹操に右の次第を語りました時に自
此の魏の曹操といふ人は性短氣でございまして其の場に至る
と物を調べてから斯うなとといふ事は誠に出来ぬ人である
書翰を見るより忽ちその間に満面朱の如く相成りまして水塞
に居る兩名を引けといふ命令に依つて直ちに部下の者二十人
ばかり罷り越して ○大将の仰せあり兩都督速やかに御出で
下さるやうにとあつて前後を取圍んで本陣へ案内をいたしま
した、蔡瑁張允の二人は何事であるかと思ひ夫へ参ると正面の
椅子に控えて居たる曹操火の如き有様でございませぬ曹汝等
は因より荆州の劉琮の許にあつて、我れに降参を申し水軍に馴
れたる者であるに依つて都督の大任を汝等に與へたり然るに

三 國 志

初めての戦かひに大いなる敗走ををし味方の兵を失ふい船を
奪はれ今日に至つて段々其方の舉動を尋ねる處周瑜に對し内
通ををし居る處の不屈き者人面獸心とは汝等の事なり只今改
ためて其の罪を糺すから左様心得る是を聞いたる蔡瑁頭を上
げたる事にして蔡先づ相丞暫らく留まり玉へ我れ如何にし
て呉の國へ内通をいたすべき周瑜と計つて味方の敗走をなし
たるなと申しいふ覺え少しもない曹汝舌を動かそ事勿れ只今
に至つて申譯をあすと雖も既に確かある証據あれば汝の一
言を聞くに及ばん誰かある兩人を引出して斬れハツと答へて
部下の者刀を提げて夫へ進みました蔡瑁張允色を變へて蔡
我々兩人命を惜むにはあらざれども更に敵に内通をいたした
る覺へあしと言譯するど雖も少しも聞かず終に其の首を割
ねて終いしましたが此の兩人も故主の劉表の倒るゝを願事

三 國 志

いたしたるものでございまるから今日に至つて斯る終りを
遂ぐるのは自業自得で致し方がございませぬ早速其の死骸を
取捨て蔡瑁張允の妻子は國外へ逐放といふ事になり改ため
毛玠を水軍の大都督とあし干禁を副都督といふ事に定め一日
も早く呉の國を攻むべしとあつて茲で充分水軍の役々を定め
ました此の事早くも周瑜の耳に這入りましたから周瑜手を打
つて喜びこび我れを欺むかん爲に蔣幹を寄し我れ又蔣幹を欺い
て敵に取つては大切なる水軍に明れたる蔡瑁張允を倒したり
最早彼等兩人を失き物にそる以上は曹操の首は斯く申そる周
瑜の手に握つたやうなものだといふに喜こんで居る此の計略
を知る者は魯肅一人でございませぬから本陣へ魯肅を招いて
周如何に魯肅我が思い通りに参り遂々曹操前後の勘辨もなく
物を一々調べもせず水軍の大將兩名の首を落した此上から

三 國 志

は曹操の首を取る事近きにあり魯肅に於ても共に喜こび魯
周都督此度の計略は實に天の幸ひを得たるやうなもの某がし
も共に喜こばしく存せざる時に魯肅此度の名策は幾ら孔明でも
知る氣遣ぬはな御身是から孔明の處へ參つて彼の舉動を窺
がひ今日この事を知るか知らんか一ツか手前の意中から出たや
うにして尋ねて貰いたいよもや諸葛亮とても此度の良策は知
るまい委細心得て直ぐに是から魯肅は孔明の許へ參る孔明は
深き計略のある人ゆゑ當時は旅舎を離れて船生かをして居り
ます其處へ魯肅參りまそると孔明サアどうぞ是へ今日御入來
になつた仔細は某がしも存じて居る魯フウイン孔明都督
此度は剛ひ手柄をやられたナ偽書翰を書いて酔つたる緒をし
て其の書翰を蔣幹に盗ませ曹操を怒らして魏の水軍の大將
瑁張允の首を刎ねさせるといふは此上もなき周瑜の上出来ど

三 國 志

うも旨くやつた魯へエー先生御存じでございますか 孔イ
ヤ其の位ぬの事を知らんで何といたさう併し周瑜のおしたる
計畧も良策には違ひまいが誠に曹操といふ者は勳辨のない事
を能く調べて蔣幹子翼の言葉を全くと思つて彼の兩名を討つ
なぞといふは甚だしい事だ之吳の國の榮を見る事誠にどう
も喜こばしき事に存せざる魯公が是へ來りし事は大方孔明は此
の計略を知るまいから行つて様子を見て來いと都督に吩咐つ
てお出でのやうに思ふ魯へエーどうして夫が分りませ 孔
魯公の顔に書いてある魯何處に……孔明撫つては往かん
魯どうも先生恐れ入りました手前が是へ參つたのは全たく周
都督のいふには此の名策は諸葛亮とても知る氣支ひがまいか
ら行つて様子を見て來いと申されて參つたに相違まい 孔ウ
ム併し魯公歸つたら右の事を周瑜に告げて下さるお豫て私を

三 國 志

殺さうといふ念が充分ある人で、
位ぬでは愈よ孔明を助けて置け
ぬ、斯うして置ては呉の國
の爲にならんから殺さうといふ
念が愈よ起るに相違ない、どう
も今私は殺されるのは思だ夫ゆ
ゑどうか黙つて居て貰いた
い、魯誠にとりも恐れ入りまし
た、孔併し計略の速やかあるは
周都督は剛いけれども聊さか不
足して居る處がある、其の不足
さへ充分に届けば曹操を倒す位
の事は一戦二戦の内にあるが
誠にハヤ物は充分に往かんで
な、牙ある物は角なしといふ
譬の通りで、といひながらニコ
／＼笑つて居るから魯は驚ろ
いて其健酒の馳走になつて立
歸りました、夫より本陣へ戻
ります、と得意頭に周瑜は人
を遠ざけ魯肅を夫へ招いで
つた、孔明は知るまいか、魯
如何にも知りません、周
ウム全た、周何を溜息
く知らんか、魯全たく知らん
……オーン、ウーン、周何を
溜息

三 國 志

を吐いて居るのだ、魯どうも都
督孔明といふ人物は大變な者
で、實は知らない處ではござい
ません、周へエー知つて居るか
い、魯知つて居る所ではござい
ません、周何だい、魯拙者が參
ると突然顔を見て此度蔣幹子
翼を討つて蔡瑁張允の僞手紙
を彼の手に握らせ曹操を怒ら
して蔡瑁張允を倒したのは實に
剛い、呉の國の爲に誠に喜ば
しく思ふといつて大層喜こんで
居りました、周へエー魯貴公
今日參つたのは大方此の計略
を孔明が知つて居るか、夫とも
知らずに居るか、試さうが爲め
に都督に陽附つて來おすつた
に相違あるまい、魯公の顔に
書いてあるといつた、どうでせ
う書いてありませうか、周イヤ
書いては、魯夫からどうも拙者
も仕方がないから委細を打明
けた、周ウーム、魯夫も宜い
が孔明の一言にどうぞ此の計
略を知つて居るといふ事を周
瑜に告げて呉れるを、周都督は
兎角に我れ

三 國 志

を恨んで吳の國の爲に動もすれば孔明を倒さんといふの念か
ある人ゆゑ此の計略さへ知れては愈よ生かして置てはならん
といつて徒らに我れ恨みを受けるやうなものでないからいつ
て吳るふと申ました 周、魏、蜀、呉、五國は 周、魏、蜀、呉、五國は
うも孔明といふ人物は油断が出来ん此の分では竟には江東六
郡八十二州も孔明の働らきに依つて劉備玄徳の手に握られる
やうな事になるやも計り難い、さうしても彼を活かしては置け
ない 魯、又、初、ま、つ、た、夫、を、皆、先、方、で、知、つ、て、居、る、周、好、し、孔、明、
夫を知るに於ては我れ又孔明の意を挫げて彼を倒さんとする
に難き事のあるべきかと周瑜も一の豪傑でございませるから
其儘にして其の日は濟まして置いて日數四五日を経て愈よ今
日は軍立をいたし評定をそるといふ事になり何れも武官は
所へ居並んだる様子、甘寧、韓當、周泰、將飲、太史慈、潘璋、呂蒙、黃蓋、な

三 國 志

んをいふ何れも是は剛ひ人で魯肅の傍には副都督の程普、皆、持
子を連れね孔明も全じく其の處へ死席いたしました、各々議論を
吐かうとする此の時に周瑜席を立つて孔明に向ひ申しけるは
周、叔、先、生、幸、は、ひ、に、し、て、初、度、の、戦、か、ひ、に、大、功、を、現、は、し、尙、一、日、も
早く曹操を討つて天下を泰平に納めたく心得るが併し先生は
座ながらにして戦利を見貫くの氣量あり此度の戦かひは如何
にいたして利を得る事が出来やうか能き計略あらば此の處に
於てお教えに預かりたい 孔、是、は、さ、う、も、周、都、督、の、一、言、も、存
せん亮の如き者に對してお尋ねおくとも尊公は都督の任に當
り水軍を引いて戦かう事、中々以つて我々の及ぶ處にあら
周、イ、ヤ、併、し、先、生、は、さ、う、し、て、宜、か、ら、う、と、い、ふ、其、の、一、點、を、お、教、え
に預かりたい 孔、左、様、江、に、船、を、浮、べ、て、の、戦、か、い、に、は、先、づ、石、矢
を用ゆるを專一といいたし、陸路の戦かいなれば随分一騎討をそ

三 國 志

る事も出来が水軍では船を離れる事ゆる陸のやうに一騎討
といふ事は出来んに依つて矢戦争をするに限る周瑜ハタと
を打て 周成程某しも先生と同成で矢戦争をそるより外ない
けれども茲に一ツの難儀がある其の難儀といふは我國今日ま
で泰平打續きたる爲めに誠に赤面ではあるが矢が不足して居
る併し今日に至つて俄かに其の矢を造るといふ譯にも往かん
が先生何か御名案はござるまいか孔明何にもいはんで周瑜の
顔を見て居りましたが 孔ハ、ア矢が不足して居る昔し太公
望自から武器を造つて戦争に用ゐしといふ事も聞いて居る矢
が不足とあるから御依頼申す宜しくお造り下さいまし 孔宜しい不
うか先生に御依頼申す宜しくお造り下さいまし 孔宜しい不
肖には候へ共諸葛亮は矢を造る事に妙を得て居るヲ都督と
の位ぬ入用であるか 周然らば矢数は先づ五万と七万をけれ

三 國 志

ば軍用にはあるまいと思ふ 孔五万七万といふやうな半端で
は誠に困るがどうか十万あれば十万と極めてお貰ひ申したい
周ウム夫は忝じけまい十万本の矢をお造り下されば何より
だが夫も三月四月と月を重ねるやうでは不都合であるが先生
どの位のぬの日数を重ねたらば御出来に相成らうか 孔成程某
しどても長き月日を費やすの念はござらんが先づどの位のぬ
日数に出來をすれば宜しいか 周然れば一日に一万づつとい
矢を造つてお貰ひ申したい 孔ハ、ア一日に一万づつとい
は十万本の矢を十日の内に出來るといふのであるか些と夫は
出來兼る 周併し先生只今の御一言に五万七万の半端では困
る十万本と極めて貰いたいと仰せられた位ぬなれば其位のぬ
日数があれば御出来にならう 孔どうも十日では些と出來兼
ねる 周然らば十万本二十日では如何 孔二十日では困る

周夫では先生との位ぬの日敷を費やしたれば出来にあるか
孔明然れば先づ今日を除いて三日でやらうか
周「三日……ウ
ム」三十日を敷へて居たか
周「シテ見ると十一月七日の日に
は出来まそな孔明指を打つて勸定をいたし孔明成程十一月七
日夕景までには必らせ十万本を造つて御覽に入れやう事に依
つたらばもう少し澤山出来るかも知れんが多いからといつて
叱言をいつては往かあい十四五万も出来やうと思ふ併しマア
十万本として置かう
周「ウム先生自身でお造りになるか孔明
固より私一人でやる何で此の位ぬの事が出来んといふ事はあ
い周瑜孔明の顔を見て居りましたが形を改ためたる事にして
先生軍中に虚言なしといへばよも偽はりはござるまいか孔明
周より不肖には候へ共諸葛亮字は孔明是へ來つて軍師に偽はり
りを述べて何といたそう
周「然らば是へ血判をいたして貰い

第十一席

たい孔明、宜しいとも早瀬今日を除いて三日の間に十万
本の矢を造るといふ事を認ためて孔明血判をいたして其儘に
退りました然る處果せるかな爰に三日の間に十万本の矢を得
るといひ孔明の名智を揮ひまするの一條でござります。
周都督を初め一同に於ては孔明の強膽に驚ろき、どうして三日
の間に十万本の矢を造る事を請合つたが夫ども孔明の事だが
何にか巧みがあつて俄かに是を買込むといふ目的でもあるか
何にせよ一大事だと思ひまする時に血判が終ると孔明は椅子
を離れ孔明扱周都督愈よ明日から三日といへば手前も支度を
しおげればおらんに依つて甚だ中座をして済まんけれども立
歸りて直様矢を造る事の用意をいたそ一同御免下さいと孔明
は中坐をして終つた周瑜此の時に孔明の後ろ姿を見送りて居

三 國 志

りましたるが忽ち中心に思ひ當る事ありと見へ、ハタト膝を打
ち早々是へ弓師矢師を招げど部下の者に命じました處が呉の
國も廣うございまするし都に居りませる弓師矢師といふ者は
中々五人や八人ではございませぬ其の中で頭立つたる者を七
人呼んで周是へ其方等を招いだは餘の儀でふい今日より五
日間金銀は何程なりとも出せから矢を造れといふ者があるか
も知れん若し左様な者があらうとも依頼に應じて一本の矢た
りど躑躅も造る者は早々罪に行かうから左様心得る ○へエ
夫も周政府より命令の外は決して矢などを造る事は相成らん
かありと雖も五日間又役所へ届けせして手許にある矢を假令聊さ
刑に處せざる日數も夫を賣拂つたといふ事が聞えれば速やかに處
い何れも承知した趣むきを答へ請書をだし 周尙其方共より

三 國 志

都に居る弓師矢師一同へ對して今日より五日間矢を造る事は
相成らん赴むきを申し傳へる ○委細長こまりましたといつ
て一同は歸りどういふ譯かは知らんけれども全体の弓師矢師
へ其趣むきを通知致しました、ソコで周瑜は魯肅を招いで 周
御身再び孔明の船へ參つて様子を見て參るやうに、大方は矢
を造る事に苦心して居るに相違ない今から竹を切つて矢を造
らうとしてみても天狗ではなし十万の矢を中々三日や四日で出
るものではあいが大方は彼驚ろいて船を早め江夏を差して逃
出さんともるに相違ない若し逃げんとせるとやうな事があらば
取押へ嚴重に約束をして置きなから密かに逃去るといふ廉を
以つて彼の首を刎ねても大事あるまいと思ふ御身早々に參つ
て彼の舉動を見届けて參られるやう魯肅心得て其儘に諸葛亮
の居りませる船へ參つて見ると亮先生椅子に憑り本を出して

三 國 志

頻りに讀んで居る 孔子は是は魯肅今日は大に失禮をいたした 魯エ、先生先づお尋ね申しますが十万の矢をお造んか
さるどの事 孔子はさうく十万の矢を造る事を約束をして来た
私は嘘を吐いた事はあゝい必ら造つて見せる 魯併しまだお
支度をなさらん様子 孔子は今から支度をして仕方があ
先刻周瑜に對して些と返答に困つたから歸つて矢を造る支度
をするといつたが、二十万や二十万の矢を造るにそんな心配
配をしないでも宜い魯肅お前は人が宜いから何か心配をしな
さるが決して心配は無用だ、ソコで七日の日の夕方に持つて行
かなければならんが就ては魯肅六日の午時に三十艘の船を貸
して貰いたたい夫に貴公も同船をして行つて貰いたたい國に
を張つて終つて中の見えないうやうにして夫で矢を受取に參
のだから魯公も証人だから其の船に乗つて行き玉へ孔明が

三 國 志

案内をして矢を受取に參り七日の正午前には周都の溝足す
るやうに悉く納めやう 魯ハテ 孔明から人夫に申附け
て船の國へ青い布の幕を張つて高さ九尺位に幕を束ねて
屏風のやうに四方に積上げる事を早々用意して貰いたたい 魯
へエー幕を束ねて屏風のやうに巻くといふは何の爲でござい
ます 孔明の爲でも跡で解るから早々に用意をして六日の夕
景に來て貰いたたい、私が案内をして十万の矢を受取に行くから
といつたなりに孔明に於ては平氣な顔をして又本の方へ目を
曝して居る様子魯肅も何ををるのたか解らぬが孔明のいふ
事でございませぬから早速に立歸つて高さ九尺の幕を束ね夫
を船の國へ積上げ屏風のやうに捲らへ中へ幕を張つて只出
入をするだけに口を開け中へ七八人位ぬは這入れるやうにし
て悉く用意をいたしましたが何の爲めにするのだから些と

三 國 志

も解らぬ時に建安十三年十一月六日夕景に相成ると三十艘の船を取揃へて来た孔明大いに喜こんで孔イヤ魯肅大に御苦勞でござつたサア御身も私と同船をさつしやい夫から鉦太鼓を取揃へ酒の用意もして貰ひたい魯全体先生是から何慮へ参るの孔宜いから私のいふ通りにさつしやい魯先生來ん夫だから一本も出まいちやアございませんか孔まだ出ソコで船の中へ悉く道具を取揃へ孔明の命令に依つて船へ乗りましたる士卒とく道具を取揃へ孔明の命令に依つて船下知を傳へ静かに其の船を渡出し北の方に向つて往かんどもれば曹操の船陣で恐らく敵は三千餘りの同勢あり武器の数をどは何萬と限りぬ位の中々三十艘や二十艘の船を以つて

三 國 志

行く譯にはなりません第一戦争をする機械も持たんで夫へ乗込んで行くといふのは甚は危うい事と考がへます孔明は左様に心配をしないでも静かにして行きさへすれば宜いといつて何と申しても孔明は聞かぬから仕方がい、水夫に於ても怖々あがら船を押して参りまると其の夜曹操の陣に近附いたるのはモウ彼是三更を過ぎます頭はひでございませぬ敵の陣近くなりませるから魯肅も驚ろいて魯先生是は何の爲めでございませぬ孔明イヤ別段に不思議はあいな矢を受取るに参るのだ、今に先方から矢を渡して呉れるから仔細ない」と孔明酒を飲みながら大きな聲を上げて詩なを吟つて居る、餘りの事に面々は驚ろいて、どうなる事かと心得て居りまると其の夜の彼は四更稍玉更といふ頃にはひに相成りました。○「どう深く下りて隣りの船も見えないやうに相成りました。○」どう

三 國 志

したんだか是は怖ろしい霧ではあいか孔明此時に各々に下知
を傳つて孔サア是からた今宵斯の如く霧の下りる事を我れ
既に知つて此の處へ來つたり益々敵陣近くへ進んで聲を揚
れば敵方驚ろいて矢を放つに相違ふい其の矢先に立つと雖
も豫て用意あしたる事ゆゑ決して怪我をそる事はあひ只船の
内に聲を上げて居れば宜いといふのを聞いて一同が成程斯う
いふ計略のあつた事か初めて感心をいたしソコで敵の水寨
近き所へ船を進め扱儀かに鐘を鳴し鼓を打ち太鼓を叩き関の
聲を上げる様子驚ろいたのは毛玠干禁兵士でございません各
々其の鳴物の致を方を見れば眞暗でございまして霧が深く下
りて居るから向ふが少しも見えない一人の聲が十人にも二十
人にも聞える位ぬ只ドン／＼チャン／＼ワ／＼といふ聲が
自然と船へ近附いて來るかと思ふばかり水寨に居りまする多

三 國 志

くの者の驚ろきは一方ならず早速に此の事を陸路の本陣にあ
る所の漕操に注進をいたしましたゆゑ大きに曹操も驚ろき
曹扱は水軍にまかれたる周瑜夜討を仕掛たに相違ない夜明けま
では霧の爲めに尺呎を分かつたさる位ぬゆゑ成べく敵陣の近寄
らざるやうに只矢を放つて退ぞけるやうにいたして居れど大
將の命令でございますから忽ち矢を描へて水寨の船より
射出する所の矢先に於ては三十艘の船へプツリ／＼通りま
けれども皆驚れに通つて終うのでございませぬから中に居りま
する人間は一人も怪我する者もなく只酒を飲みながらドン／＼
チャン／＼ワ／＼といつて居るばかり其内に孔明下知を傳
へて船を廻せといつたからグル／＼グル／＼船を廻して居り
ませぬとプツリ／＼船の四面の護屏風へ其の矢が當りまする
事恰で袋の毛の如くでございませぬと暫らくの間やつて居る其の

三 國 志

内へ敵陣に追々近くなり関の聲を益々上げますから今にも
夫へ突掛つて参るの有様何ふが見えぬから曹操の船陣では
周瑜を倒すは此時ありと思ひ愈々奮つて矢を放ちます孔明
此の時に天文を見て居りましたがもう今に霧が晴れるといふ
刻限に至りましたからソレ船を返せといふ下知に依つて兵士
は直ちに其の船を返そうとする内に、ハヤ夜は明近く相成りま
して風の爲に霧は晴れて参りました、毛玠、干禁を初めとし曹操
に於ても自から水軍へ來つて様子を見るに僅か三十艘の船で
其の圍圍に張つてある幕に通つて居りまはる矢數といふもの
は何萬といふ數を知らざる位に扱は又計られたるかと思ふ其
内に孔明の船に於てはエイサクと鐵を切つて元の處へ船
を戻しました此の時孔明はニツユリ笑つて孔明魯肅斯の如く
矢を受取つて來たから數を改ためて貰いたい、先き一寸見受け

三 國 志

たる處十四五萬もあるたらう敵の矢を取つて敵を謝るといふ
は此の上もなき計早速敵を捨てたため周都督の處へ納めて
いたい魯肅暫くの間孔明の顔を見て居りましたが魯二
ツとさうも相變らさ先生の名智恐れ入りしました孔明を三拜い
たし魯シテさうして此の霧の下りる事を先生は御存じであ
られましたか孔明此の間軍議の評定の席に於て某がしに
十方の矢を造れといふ周都督の命令固より是は都督の難題と
思つたが其の時に我れ天文を見ると必らや十一月六日夜に
至れば霧深く下りる事を知り夫に依つて速やかに其の事を承
知いたし今日御身の手を煩はして船の用意をいたし敵陣近
くへ乗込んだる處果して霧深く下り敵に於ては夜討を仕掛ら
れたと思ひて必死となつて矢を放ちたるがゆゑ一時に斯の如
く多くの矢を得たるである早速に周都督の處へ届けて貰いた

魯承知いたしましたと魯肅夫から其の矢を檢たためさせる
と十二万六千と云ふ數でございませす曹操の方では味方の矢を
十二万六千取られる位ゆる水中に落ちて居るのも三萬や四
萬ではございませませい、さすれば十五萬や十六萬の矢を失ふつ
たやうなもので是だけの軍器を一夜に失ふうばかりか皆敵の
手に落したのは大いなる不利益でございませ、夫に引替えて此
の國に取つては此の位縁起の宜い事はない、早速魯肅より大
次第を都督に告げたる時に周瑜に於てはハタト手を打つて其
明の名智に驚ろき先づ其の矢を悉ごとく倉庫に收め右の次第
を討慮將軍孫權に告げたる時に孫權も大いに驚ろき呉夫人に
於ても實に孔明の奇才不思議ある事に恐れた位、遂にお説し
別れて曹操に於ては大いに怒り、一ツの計謀を廻らして其の
周瑜を欺むかんとする周瑜計略の要を盡して其の計を破つて

第十三席

防ぐ事を思ひ燃焼に及ぶの手續きを懸より辨じませる、
曹操は本陣にありて大いに激しまして、初めの驍かひに馳走を
あし又孔明の計略に踏かつて十數方の矢を徒づらに失ない、此
邊梅で戦争をしては所せんどうも勝所はあるまい、周瑜は戦争
に馴れたる者、殊に水軍は最も得意とする男、孔明が帷幕の内
に計略を授けるとあつては是は尋常では往かん、どうがなして
呉の國の事を探つて第一番に周瑜を倒し、尙孔明を退ぞけざる
内は逆も呉の國を我が手に入れる事は出来んと大いに教息を
いたして居りませる、其時に曹操の傍に扣て居りませしたる張
遼進み出て、張恐れながら斯様にいたしては加何でございませ
せうか、過日敵に内通したりとあつて一命を取つたる蔡瑁に蔡
和蔡仲といふ二人の弟がございませす、此の蔡和蔡仲に情けを掛

三 國 志

けて却つて是を表向いて吳の國へ降参をさせ周瑜の手許に於て密かに此の二人の許から敵の機上を注進させるやうにいたしたならば宜しきとせしませう 曹汝の計略至極面白いが蔡和蔡仲の兩名飽までも偽はつて敵に降つて居るおれば宜いが高も亦るに依つて其儘周瑜に眞の降参をそるも計り難い 張君に於ても彼等を厚くお用ひに相成れば必ら充分に其の役を勤むるに相違ございませぬ先づ手前が様子を尋ねませうと張遼夫から蔡和蔡仲の二人の様子を聞くといふ共一旦相承の恩を蒙る上は何卒兄に代つて忠を盡したく如何なる大切の御役にても相違なくいたすといふ兩人の言葉然れば斯様々々にいたせと計略を授けますと蔡和蔡仲の二人是を承知いたし八百の軍勢を卒き十餘艘の船に乘つて其の翌日只今の時

三 國 志

聞にそれば午後二時といふ頃はいに周瑜の船陣の許へ参りました此の様子を見るより甘寧何事やらんかと思つて見ておれば船の真先の處へ白き旗を打つてありませ今でも昔しでも白の旗を立てて來る時は降参の印しでございませ兩名共に其の本陣に來つて三拜をさし 蔡某がしは一度曹操に事へたる蔡和蔡仲と申する者兄は永く荆州にあつて水軍の都督を司さむつて居りましたる、蔡瑁と申する者兄は先頃周瑜將軍に内通をいたしたりとあつて曹操の爲めに殺され我々兄弟は幸はいに一命を助かり今日まで曹操の手許に罷り在りしと雖も恨みこそあれ忠勤を尽さうといふ念はない今日好き折を得たるに依つて部下の兵八百を卒ひて是れへ來たり降参を仕まつるに依つて何卒周瑜都督に此の事を告げ我々を家來とあしたまはらば如何やうなる御役をも勤め申すべく且つ職かいのどきに

三 國 志

は先鋒の内へ御加へ相成りたく此の段御承知に預かりたい甘
寧兩人を夫れへ留め置いて早速此の由を周都督に告げます
と都督周瑜喜んで早速二人に目通りを申し附け 周其の方
等兩人全たう心から出で我々に降参を申し呉の爲めに尽す
といふか 蓋尤つとも左様たいに我々兩人のみならず引き連
れ参るつたる八百人の同勢悉く我々どもに降参を仕ま
つる 周然らば汝等願が聞き届けるであらう甘寧に
申し附け八百人の兵士取り別けて蔡和蔡仲を鄭重に取り扱つ
かいまするから兩人胸中に喜るゝんで居りました其の夜
とでございませるが本陣に扣かへて居る周瑜一人を酒を飲ん
で何にかものを考んがへて居りませるところへ遁入つて来た
のは黄蓋此のひとは是れまでしばし現はれて居る人でと
さいませるがモウ年は五十六才本陣軍にあつてはアツパレなる

三 國 志

勇士でございまして周瑜も常々此の人には軍事のことをたず
ねる位、黄蓋うれへまわつて 黄周都督御酒かい 周これは
黄蓋、おんで今頃見えられた 黄外ではないが今日蔡和蔡仲の
兩名我が國へ降参をいたし都督は是を許されたが彼れは全た
くの降参と都督は思はれるか、外に人も居ないから遠慮なく
しをして貰ひたい周瑜ニツコリ笑つて 周是は黄蓋の一言と
も存せん、彼等が全たくの降参にあらざる事は我れ一目して分
る今日曹操を恨んで其の國を遁れ我國へ來つて降参をするの
心底おれば八百人の同勢を卒いて來るよりは妻子を連れて來
なければならぬ、然るに其の中に女たるものは一人もあひ、兵
士と雖も何れも勝れたる者ばかり恐らくは曹操我れを欺む
かん爲めに蔡和蔡仲の二人に偽はつて降参をさせたものと思
ふ、けれども敵の計略の裏をかいて敵を破ぶるのを反問苦内の

三 國 志

計畧といふ、彼等が至たの降参でない事は、大官のやうだが、周
瑜は辨まへて居る。黄蓋は然らうと心得て居た、彼等の降参は
最とも危うい。此の上共に都督、曲断をし、玉ふも、周、其の邊も能
く心得て居る。甘寧に萬事申し附けて置いたゆゑ、彼等が出入を
一々檢ため、何事に依らぬ曹操の許へ報知の出來んやうにいた
したに依つて、黄蓋の心配は、誠にも悉しけぬ。能う拙者も存じ
て居る。といひ、みながら、頻りに其の黄蓋の顔を見て居りましたが、
其儘で眼を閉ち、物をも云はず居ります。様子、黄都督、今日、茶
和、茶仲の兩名、眞の降参でないといふ事を、知る位、わの辱公、ゆゑ
計畧に苦しむ氣、支いはないが、呉には孔明といふ者が、滯在をし
て居るから、迂濶の事をして、孔明に笑はれんやうにと思ひ、其の
機に就て、某がし、密やかに罷り越した。と、尙ほ暫らくの間、周瑜と
黄蓋は密談をいたして居りました。が、周瑜此の時に頭を下げ、黄

三 國 志

蓋に向つて三拜をなしたる時に、黄蓋は、黄、併し、周、都、督、此、の、事
は、決、して、人、に、語、り、玉、ふ、を、我、れ、固、より、呉、の、國、を、思、へ、ば、こ、う、右、様
お、決、心、を、い、た、し、た、の、で、あ、る。周、イ、ヤ、某、が、し、争、で、か、口、外、を、い、た
す、べ、き、か、誠、に、尊、公、が、國、を、思、ふ、の、念、深、き、に、感、心、を、い、た、し、た。黄
イ、ヤ、某、が、し、既、に、呉、の、三、代、に、事、へ、莫、大、の、恩、顧、を、蒙、り、た、る、者、お
れば、是、し、き、の、事、に、己、れ、の、身、を、碎、いて、奉、公、を、お、す、は、決、して、豚、ふ
處、で、お、い、却、つ、て、是、が、爲、に、國、に、利、益、す、る、と、思、へ、ば、喜、こ、ば、し、く、思
ふ、が、都、督、此、の、事、を、人、に、語、り、玉、ふ、な、し、陣、中、に、於、て、何、や、ら、約、束、を
して、其、の、ま、り、黄、蓋、は、自、分、の、陣、へ、歸、り、ま、し、た。周、都、督、は、頗、ぶ、る、大
酒、を、好、み、ま、そ、る、か、ら、尙、夫、よ、り、酒、を、飲、み、其、の、夜、に、於、て、は、何、事、も
な、く、ソ、コ、で、其、の、翌、日、第、二、の、戰、か、い、に、曹、操、を、破、ら、ん、と、い、ふ、軍、議
評、定、例、に、依、つ、て、軍、師、武、官、何、れ、も、夫、に、居、並、び、孔、明、も、招、が、れ、ま、し
て、共、に、其、の、席、へ、來、つ、て、各、々、の、議、論、を、聞、い、て、居、り、ま、す、る。周、瑜、は

三 國 志

副都督の程普と共に二三評議をいたして居ります内、座の
中央に扣いて居りましたる黄蓋、黄都督に相尋ねる愈よ近日
再たひ兵を出だし、曹操百萬の同勢を破るといふは至極面白い
併し、あがら今日備えてある兵糧はどの位ぬであるか、其の貯は
への兵糧を承たまはりたい、周瑜此の時に至つて黄蓋の顔を見
て、周兵糧は三月分を用意いたしてある、三月分の兵糧を貯は
へてあればモウ充分と心得る、黄往かんま、まだ夫は周都督若
い、曹操を眼下に見下す事は甚はだ宜しくない、彼は百萬の同勢
を手に握り、勅命なりといつて兵を集め、又糧も充分に用意して
ある、其の曹操を倒さんとすには三年の兵糧を貯はへ三年の
間に弓矢等をも充分に整へおければ尋常に曹操を討つこと
は、遠も出来ぬ、此の間の一戦に勝つたのは俗にいふ勝れり、
に勝つたであつたが中々尋常に勝つ事は出来ぬ、夫を倒すと

三 國 志

て居られるは、周都督にも似合ん事であるといふのは、周都督は
充分に學問といふ事を修め、只武を以つて事をいたそ男で
あるから、勳もそれば充分の了簡で事をして、前後の事を顧み
いで困る年を老つて充分の學問を修めた者でなければ、恐大將
といふ事にはあられん、周都督は速やかに辞職をし、玉へお手前
如き者が大將とあつて戦かひをする、雖も勝つ事は出来ぬ
い、周瑜此の時に色を變へたる事に、周黄蓋、酒に酔うた
る、か但し何か此の周瑜に對して、道恨あつて會議の席上にあつ
て、我れを罵言する、魏の曹操は何だ、彼は漢の天下を奪はんと
する、賊あり、其の曹操を退治するに勝つ事は出来ぬとは、何た
の勇氣を増して、味方の勇氣を挫くといふは、怪しからざる事、今
一言申して見よ、仮令年老たりと雖も、用捨はいたさんぞ、黄
年老つて居るから、用捨をせんと、いつて此の黄蓋を何とす

三 國 志

る斯く申せる黄蓋をどうも三月分の兵糧では不足して居る
愈よ戦かひになつて糧が不足して居れば必ず味方は破れる
に違ひないから味方を思ひ時を思ふて申したるに此の某しを
何とする、今日惣都督の任に在ればとて餘り大仰な事をいひ
さんな何の其方のやうな軟弱ある者が采配を執つて戦かひ
そるに於ては必ず曹操の爲めに打破られ汝は首を断たるし
に相違ない飽まで憐憫罵詈雑言を加へますから椅子を離れた
る周瑜烈火の如くにあり暫らくの間は周瑜の顔を見て居りま
したが周まだしても汝舌を動かすか陣中に於て惣大將たか
某がしに對し右様なる無禮を加うるに於ては年長けたる者と
雖ども其分には拾置かん黄よく年長けたる者おれば拾置か
んといふ五十餘才に相成る黄蓋汝の怒りに觸れたればとて申
そ事を改ためるやうな者ではないといひながら周瑜の面に對

三 國 志

して、カッパと痰を引掛けたせうも其の痰の臭いの何のどいつ
て鼻持のならない位ぬ周瑜大いに怒つたるものと見えて周
誰ぞある黄蓋を縛せよと呼はつた面々夫へ出でまして ○先づ
都督暫らく留まり玉へ今日戦かひをいたさんといふ其の時に
臨んで黄蓋を罰する事甚はだ以つて不吉なりとぞ此の處は
止まり玉へと申ししたが一向に聞入れない黄蓋此の時に至り大
口開いてカラ／＼と打笑ひ 黄イヤ黄蓋を縛せなとよは以つ
ての外貴様のやうな者に縛せられる黄蓋ではない、サア縛せる
ものなら縛して見よさいと更に驚ろく氣色もなく罵しりませ
るから周瑜愈よ怒つて怒まぢの間に部下に下知を傳えたる事
にして大都督の命令に背く譯になりませんから各々黄蓋に取
つて掛つて終に其の處へ捨倒しなして手足を縛したる様子
り上げられたる黄蓋恐るゝかと思ふと少しも恐るゝ氣色なく

黄サア此の上からは早々斬れ、汝に斬られるやうな黄蓋ではあ
い見事に切つて呉れ、周ムム斯くなる上は是非に及ばん、黄蓋
汝の首を貰い取るぞと、劍を持つて立上り、周コレ者共打て、打
てッといふからは非に及ばぬ大勢、其の處へ居流れたる者、腰を
持つて打たうといはした、が何分にも眼光鋭く、睨まへまゐる
其の勇氣に、恐れて打つ事が出来な、い、けれども周瑜の怒りが激
しいから、據ころなくビョリッ、と打ち初めた打たる、と雖も
も黄蓋聲を上げる事もなく、黄サア打て、といふ内に周瑜
立ち上がつて、夫へ目を注いで居たが、周エ、イ手緩い、モッ
と鋭く打て、二三人では往かん、七八人で打て、と、據ころな
く、各々夫れへ参る、り黄蓋を押さへてビョリッ、と打つ如何
に、豪傑でも皮は破ぶれて、血沙は流れ、肉は裂れ、ヒョリッ、と
を上げるやうす、周瑜やうすを見て、居りました、がまだ是れでも

飽足らぬものも見え、自らから、腹を上げてビョリッ、と
打ちまゐる、其の機中といふものは、實に、機中極まりでございま
す、

第十四席

周瑜は飽までも黄蓋を打撃、えんとする様子、程普、程平、程
はさま、に周瑜の怒りを、締め、黄蓋は皮破れ、流る、血沙、
しく、けれども、老人、少しも、罵る、處なく、周瑜を、悉とく、罵
たします、するを、漸々の、事、で、大勢、黄蓋の、腹へ、是を、案内を、いたしま
した、黄蓋、齒を、食糲り、黄ア、残念だ、某が、しから、見れば、年、過か
に、劣つたる、周瑜の、爲めに、自から、打撃、えられたるは、此上も、なき
外、聞、残念の、事である、といつて、頻りに、口惜がつて、居り、ま、其の
處へ、醫者が、來つて、手當を、しやうとして、も、中々、手當を、させ、ない
黄我、周瑜の、爲に、斯の、如く、打撃、えられたるは、儼よりの、耻、辱、後、は

三 國 志

又某しを打搦えたるを何よりの喜こびに心得やう、今悉じいに
手當を受るは甚はだ快よしとし、此の儘にして置て呉れる
やうにと切囁をあして黄蓋頻りに無念の涙を流して居る、處へ
参りましたのは丁度年は黄蓋と全じ年で關澤といふ者、大勢是
を見て關澤は宜い處へお出にありました、關イヤと申し
へ手當をしたかへ、〇イエ我々か手當をいたさうと仕まつり
ましても中々させません、早く傷口を洗ひ醫術を施ささうと心
得まそゆるさうか貴所から一ツ黄蓋をお説き下さい、關イム
夫はさうも困るゝ私に黄蓋とは別段の間柄ゆゑ宜いつて聞せ
やう併し此所では往かん人が來ると面倒だ話しが出來んから
と關澤側へ立寄つて見るとウンウン呻つて居る、關イと申し
大分身体を痛たを、私も側に居て留る事は知つて居るがモ
ウ斯いふ場合に至つては某しが留めた處が逆も怪かん夫ゆる

三 國 志

留まに居つたが誠に酷い目に遭しつたを、貴イヤ、關イヤ、
ば關澤如何にも我は残念だ、呉の國にあつて三代に奉公をなし
て今日周瑜の爲に斯様奴僕同様に應いをされ、利さへ罪を犯し
たる譯では、お曹操を討に三月の兵糧では不足して居ると注
意したるを却て彼は怒つて我を斯の如くに打搦たり實にさう
も働慢無禮ある周瑜彼の如き者を大都督にいたして置時には
到底戦いに勝つ事は出來ん、關イ大にさうた……幸い昔室外
に出で、誰も四邊に居らん、貴公と拙者と差向にあつたから、
をすするが決して物を隠さざるを、實はさうも呉の國の忠臣は黄
蓋其許だ、關澤恐れ入つてお手前をお賞め申さうと心得て是へ参
つた、通ばれ誠忠無二にして爲に七分通り計畧も成就なし、
喜ばしく思ふ、此の時に寐臺に居りましたる黄蓋、關澤の顔を見
て我を忘れて起上り、貴貴公の一言は其意を得ず計畧七分

り成就したとは何事だ 關イヤ知ざると思ふか、今日周瑜の機嫌を損じて周瑜の爲に打れたるも矢張約束と思ふといふと蓋和蔡仲の兩名降参をして當國に來つて居り密に當國の様子を曹操の許へ注進をむる其兩人を欺むかんが爲に黄蓋と計つて斯の如くに身体を痛るといふは呉の國の爲實に誠忠無類の人といふは黄蓋其許だ黄蓋四邊を見て居り申したが聲を潜めて黄蓋は關澤貴公は某しと周瑜との志ざしを御存じか 關知らんで何といたそう先刻彼の様子を見て居るに言葉は荒くして其部下に下知を傳て居るがら周瑜面に愛いを含み兩眼に涙を浮て居た様子は心あつて打るのでないといふ事は此關澤には分た又外に一人是を知る者がある其一人といふは諸葛亮孔明孔明は周瑜怒つて御身に鞭を加たる時には却て微笑しし心たシテ見れば此ら其の計畧を知つて居るに相違ないもう隠し

玉ふな 蓋ウム恐れ入つた實は周瑜皆と計つて敵から此者が參れば味方に於ても敵の間者を偽はり呉れんど心得敵を計るには先づ味方をも計らなければ事の露顯するを恐れて自から身体を痛めて事をいたした 關ウム實に此の計畧は我れど孔明の外に知る者はなければ必らず曹操を欺むく事が出来る就ては某がし明日曹操の水寨へ參つて今日の始末を語り悉くよく曹操に安心をさして改ためて尊公を本陳へ案内をいたし表向き降参といふ事を曹操に申し込む事をいたさう此の事を聞いた黄蓋は關澤の手を取つて押載だき 黄蓋は新く計畧をいたし此の先曹操の瀕へ近附かんとあすとも何分にも痛みに堪兼ね參る事が出来如何いたしたら宜からんと思ひ居たるが貴公の一言何より忝じけあい然らば何分共に願いたい 關委細承知いたしたと表面は飽までも周瑜を恨みソコぞ關澤が

三 國 志

曹操の許へ行つて此の度の次第を語り曹操に降らんといふ事を申し込む話し別れて周瑜は本陣へ歸り魯肅といふ人は始終周瑜の側に居ります人物でございませうから周瑜は公大儀をから孔明の本陣へ参つて一つ彼れの志さしを探つて来て貰いたたい今日黄蓋を打ちし時に大勢折重なつて留むる様子は情けを知らざるか夫れども何か外は考がへるか夫を採つて来て貰ひたい魯委細承知いたしたと魯肅孔明の陣へ至りますると孔明は相變らぬ本を讀んで居る處へ魯肅が参つたから孔イヤ是は何か又魯肅の差金で参つたか魯別段の差金を受けて参つたといふ次第ではない孔ハアイヤ今日芝居を見たがどうも面白かつた魯芝居を……何處で歌舞伎座でござるか孔ナニ歌舞伎座ではない魯何處だ孔會談室で

三 國 志

面白き芝居があつた周瑜の役も宜い役であつたが黄蓋の役は骨の折れる役だ中々面白き芝居だ魯其の事に就て先生にお尋ね申しますと周瑜聊さかなる事を怒つて黄蓋を打ちしめ尙自分で手を下ろして年老つたる黄蓋を散々に打擲をいたしたる時に先生は何とか一言留めて下さりさうなもので黄蓋がそれまでに打たれ肉破れ骨現はれて大概の者おれば氣絶をいたすべき有様實に氣の毒おら様子を見て……孔イヤ其處が面白かつた私は何故隊を入れおかつたといはれるのであらうが隊を入れては狂言が止めになる大方周瑜の了簡では是たけの事をしても孔明は知るまいさういふ様子かといつて貴公を見せに奇越したに相違あるまい魯肅の前へ歸つたらばさういはずしやい面白き芝居を見て来たさうか又近日見物に行つた時に頼む次第に依れば一ツ見物物を催ささうと思ふさうも

周瑜が怒つて目を刺出し今にも噴附かんばかりの勢はひで
 を取上げて彼の黄蓋の香を打つ時に兩眼に涙を浮かめ上げる
 榜笞が何となく力の抜けたやうに見えたのは人情として忠義
 の人を此の通り苛責をそるかと思へば氣の毒なものだといふ
 ふ處が充分に見せて實に能く仕働作した先づ今日の芝居を面
 白く見たのは某がしと今一人關澤だらう關澤は中々剛い男だ
 から能く筋が解つたら併し此の位ぬに身を入れてやれば必
 らせ曹操を破る事も近きにあらう周瑜都督に對して孔明が斯う
 いつたど貴公宜しく備へて貰いたい此の度蔡和蔡仲の二人が
 參つて居るが是も味方に取つては何よりの事計略が宜い工合
 に參らうと思ふ、マアお茶でも呑んで歸んおさいと然として
 孔明の腹へる處を聞いて魯肅大いに驚るさ遣うくの体で
 陣へ戻つて參りまゐると周瑜 周是は魯肅大きに御苦勞であ

つた孔明はとうした今日の計略は孔明と雖も存じまい
 所が孔明の曰く今日は面白い芝居を見て来た是れく斯や
 ごとく諸葛亮孔明知つて居る 周ウーム 魯貴所が黄蓋を打
 つ時に思はず上げる端笞が重くあり怒りながらに兩眼に涙を
 浮かめたのは忠義あものを斯の如くに打つのは氣の毒だとい
 ふ處が充分に見えて面白かつたど斯う申しました實に恐るべ
 きは孔明でござる 周ウーム、シテ見ると知つて居るか 魯如
 何にも知つて居る蔡和蔡仲の降參をして来て居るのは味方に
 取れば何よりだ併し諸葛亮は斯う申しました、モウ曹操を破る
 事は近きにあり今一ツ計略さへ成就すれば宜しいと 周ウー
 ム 魯シテ今日の狂言を真正に見た者は某がしと關澤だと斯
 う申しました、關澤も矢ッ張り見物をしたさうで尤も追込だ
 さうで 周、嘘を吐け周瑜は驚るいて 周、成程俺から見ると孔

明は餘程惻口だ、關澤もツテ見れば、離ひ候だ」と流石の周瑜悉く
とく舌を振つて感心をいたしました。茲に關澤義の爲めに自分
は曹操の本陣に至り終に曹操を説くの一條から孔明と周瑜互
ひに敵を破るの計略を全しうし彼の南屏山に東南の風を祈る
のお話しに相成りませう。

第十五席

黄蓋關澤の兩名士は互ひに計略を全しうして幾ら周瑜が苦肉
の計畧を施こそと雖も是を用ゆる事には關澤といふ
者がなければ事を果し得なかつた、黄蓋自から認ためたる降書
を預かりまして……降書といふは即ち降参をするの状で都
督周瑜に恨みあるに依つて降参をいたそ幸はひに是を許され
るは呉の國の兵糧を盗み是を土産として必ら其の陣中に往
くといふ事を認ためたる降書是を懐こるにして關澤は一襲の

船に乗つて只一人忍んで敵を押し、旗を差して敵の本陣を差し
て参りました水寨の内より是を見て只一人船を漕寄せ来るは
何者であるかと様子を探がつて居る内に關澤船の内は立上つ
て大書を掲げ、關番兵必ら走驚ろく事勿れ某がしは呉の國に
あつて参謀を勤めたる關澤といふ者あり相丞へ對して拜顔を
いたしたい事あつて罷り越した必らず多人數を連れて参つた
次第でない、只一人であるから一同心配なく相丞に此の由を申
し入れて宜しからう如何にも三十人四十人の人を連れて乗
んで来たのでは、いから番兵も聊さか油断をいたし早速に未
より干禁の船へ案内をいたして右の次第を告げる、干禁より曹
操へ是を申し入れると曹操聞いて暫らく頭を下げ考がへて居
たが、曹さうも不思議な事があるものだ、呉の國に於て参謀を
勤めて居る關澤が只一人船に挿差して是に来るといふは、何事

であるか兎に角、面會を遂げるであらうと自分の陣へ案内をい
れせたました。武官文官は東面に住並らんで居る其の中を關澤
恐れ氣もあく罷り越した。曹操を見るより三拜をふし厚く禮を
施こします。其時に曹操は「曹關澤何故あつて此處へは來り
しそ」關然れば候、某しは君の爲めに船に挿差し只一人此の
處へ罷り越したり、相承必らき怪しみ玉ふ勿れ、此の降書を見て
其の志ざしを知り玉へどあつて取出したる黄蓋の降書曹操に見
てを見て「曹、ウ、ム、黄蓋は即ち吳の國に在つて最とも有名
る名士である其の黄蓋が只今降參をそるといふは面白いと夫
を三ひて見て居りましたが曹操忽ちの間に眠を切上げ關澤
に血を注いで居る事にして大聲を發し「曹誰ぞある關澤を縛せ
誰か來つて關澤の首を刎ねよ」と呼はつたり、心得たりと下
者七八名夫へ來つて物をもいはせ關澤を縛せんとするもあ

ば刀を抜いて懸に切つて掛らんとするものも關澤少しも恐れ
ず「關何故あつて我れに對し無禮の舉動をなすか」と曰より只一
人降書を以つて是へ來りし者を大勢にて是を縛し又首を刎ね
んとは奇怪あり相極又何故あつて一言の理由も語らさして首
を斬れといふか其の謂れは如何に「曹、關澤汝が是へ持參
あしたるは眞の降書にあらき我れ幼きより万巻の書を讀んで
能く其の道を知れり今日黄蓋の説ためたる降參の書に月日を
入れざるは如何に之偽はり相違ない我が心を動かさんとし
て汝黄蓋と計り此の降書を持參いたしたるものであらう最早
其の事を見貫く上は汝を活置く譯に相成らん尋常に首を伸せ
關ア、ハ、ハ、イヤ是は恐れ入る併し只今相承の一言に我れ幼
あきより万巻の書を讀んだとさる／＼學者といはずばかりの
お言葉ありと雖も我れ少し其の意を解せき相承は無學あ

り無識あり物の情を知らざる者なり其の人に向つて我れ如何
に言葉を費やすも何の益かあらん速やかに首を斬れ汝の如き
者を對手に議論をするは大人氣ない曹賊れ無學あり無識か
りとは何事あるや我れ苟しくも漢の帝に事へて相丞の位にあ
る者汝如き者に無學無識といはるは愛念何故あつて我れを
無學無識ありといふか汝論ゆる事あらば其の處に於て申せ夫
に應じて答へて遣はす 關答へるとあらば一應相尋ねるが只
今相丞の一言に之即ち黃蓋の偽はりの降書なり我れ又其の
偽はりを知つて是へ持參をいたしたとの事其の意は如何に
曹然れば此の降書の内に月日を書かざるは甚はだ曖昧にして
眞降參をそるとあらば何月の何日の時に吳の兵糧を盗んで
是へ持參をするといふ事を明らかに記すべきだ然るに其の事
を認ためざるは只我れを喜ばして曲解をいたさせるの計畧

ならん 關是は相丞が邪推なり日限を認ためざるは若し堅く
夫を約して急に來り難き事起らば夫が爲めに事の在のみあら
ず相丞も又疑がひの心を起さん是に依つて能と日限を書加へ
ざる次第黃蓋は今日降參をするの理由は其の書面にもある通
り周瑜の爲めに悉く悪口をされ其上のみならず大勢の部
下に命じて打据え尙飽足らざして周瑜自から鞭を持つて黃蓋
を打事夥だしく黃蓋は固より周瑜の幼なき時より學問を教え
其の道を能く教えたる則ち師なり其の師へ對して手向ひをな
す周瑜が如き者と其の國を全しむるの心なきに依つて此度
降參をそるに就て斯く申する關澤の志さしを打明け即ち我
れ其の事を傳へんが爲めに是へ參つたり然るに月日なきが爲
めに偽はりの降書なりといふは近頃相丞の思召し違いかど存
する併し此の場に至り右様の事を申し聊さかの時間たりとも

命を存生へんとぞるかと思はるゝも残念最早關澤の一命は捨
 ると覺悟いたしたから恐るに足らぬ早々我が首を刎ね玉へど
 其の辨舌滔々として懸河が流るゝばかりの有様曹操是を聞い
 て居りましたか自から立つて關澤の繩を解いて禮を施こし
 曹ア、我れ過まてり今將軍の一言にて無妙の夢は覺めたり成
 程降書の内日月を認めぬるは今其許に申す通りに相違お
 く其の志ざし誠に正しき者あり關將軍許されよ其許は吳の國
 で參謀の職を司さざる大切の方黃蓋の爲めに是へ來られた
 る上は即ち共に我れに従がうの心ある者と存する關澤是を
 聞いて暫らくの間頭を下げ居たるが關流石は相丞賢明にし
 て我が一言にて其の志ざしを知り又黃蓋が降意を迷やかに御
 聞届けにあり是に來つたる某がしも如何ばかりか喜こばしく
 存する」と夫より酒宴の用意をいたし關澤は吳の國の事をさ

の造り事をして曹操の氣に達るやうに惡口をいたし
 周瑜此度の戦かいに就て大都督の任を預かればとあつて暴
 無人の舉動をなし實に憎むべき者である」と散々に罵ります
 るから曹操は關澤の言葉信じ酒宴半に至りましたる處將軍
 一人夫へ參り ○相丞に密々申上げた事ございまを
 左様か關將軍物らく是に留まり玉へ聊さか用事あればと其儘
 に立ちました關澤胸中にハテ何だらうと思つて居ると隔つた
 る室の内でもソソく話しをして居るのを聞くと是は我て曹操
 より吳の國へ對して偽はつて降參をさしてある茶和蔡仲とい
 ふ二人から曹操の許へ寄した密書を聞いて今四五名で夫を請
 んで居るので實に恐るべきは周瑜で孔明といふ名智の人の目
 から見ると周瑜は子供の如くに思つて居るが是は中々の人で
 あるから豫て申したる通り此の兩人は偽はりの降參である

いふ事を知りながら態と甘寧に申附けて、呉の國の事をチロイ
 曹操の許へ注進をするのを知つて捨て置く其の蔡和蔡仲
 から寄した密書を開ひて見ると會議室に於て黄蓋が周瑜と大
 議論をして其の議論の末に至つて軍令に背いたりとあつて周
 瑜怒りの儘に大勢の部下に命じて黄蓋を散々に打せ周瑜自
 らも黄蓋に鞭を當てたといふ事を細々と書いて寄した是を見
 たので曹操がハ、アシテ見ると黄蓋は飽までも周瑜を恨んで
 我れに降参をするに相違おいと思へた殊に黄蓋ばかりでは
 い關澤おといふ人物も周瑜を悉ごとく憎んで居るといふ事
 までも其の書面の中に認ためてございませぬから一度最前關
 澤が申陳べた言葉と此の蔡和蔡仲の書面と符節を合せるが如
 く合つて居ります然れば曹操益々●澤を信じ再たひ其の席
 へ笑を舍んで出て参り關扱●將軍實は是までの間某がしも

半信半疑であつたが只今確かに便りあつて黄蓋悉ごとく周瑜
 を恨んで居るといふ事が相分つた尙黄蓋のみならず周瑜の
 逆無人を憎んで我れに降参をせんと思ふ者澤山にありといふ
 赴むきであるが如何でござらう關夫は澤山にあり某がし初
 め周瑜の下知に依つて戦かひをそるといふ事は面白くない
 白くおければこそ黄蓋の爲めに相丞の許へ罷り越した位に
 上共相當の役がめらば關澤に申し聞けられたい相丞の爲めに
 某がし一命を抛つて周瑜を滅ぼすに就て大いに働らきをいた
 さん曹操膝を打つて曹關將軍夫までに思召しあらば一度吳
 の國へ歸り尙此上共に右の次第を黄蓋に告げ兩人計つて充
 分に物の役に立つべき者を多く降参するやうに説いて貰いた
 船●是はとらうも相丞の仰せではやるが我れ吳の國を立出で一人
 船に掉差して参つたのはモウ吳の國に歸らんといふ覺悟して

來たので然るに只今に至り國に歸る事は甚はだ快よからん
曹さもあろうが某がしから願むに依つてどうか立歸へて他の
者を集めて貰いたい第一貴公が立歸らんければ充分黄蓋にも
我が志ざしを告げる事が出来まいと思ふ 關成程夫もさうだ
然らば仰せに従がひ再び船を呉に返し黄蓋にも申し聞かせ
其他一同の者を説いて愈よ當國へ参る時には相當の土産を持
つて参るでござらう左右する内に曹操數多の命銀を取出し關
澤に送るスルと關澤是を見向もせず 關我れ固より金銀を得
んが爲めに事を爲すにあらまきさういふ物をお送りなく
他日一廉の功を立つたる時に相當の祿を賜はらば夫にて我等
は満足に至りであるど如何にも潔白の言葉 曹さういふ事な
れば何より然らば何卒充分に事を計らつて貰いたい 關成程
承知いたしたと 尙引續いて酒宴をいたし稍前に戻るを請ふ事

分に計畧當れりと胸中に喜こび夫れより別れを告げて戻た
船に乗り呉の國に立歸つて参る曹操は計畧とは知らまいから
今にも黄蓋關澤が多く勇士を引いて兵船をも澤山に並み置
が國へ來たるであらうと待つて居ります此方は關澤立ち歸
へつて右の次第を黄蓋に告げたから黄蓋喜るこんで關澤の計
らいを謝し内々周瑜に通せると周瑜に於いては其の喜るふび
一方あらき茲に改らためて本陣に於いて第二回の合戦の評定
をいたす孔明周瑜の志ろさしを知るの一條よりいよく孔明
七星壇に風を祈のると云ふお話しは次席に委しく申し上げま
す。

第十六席

時に本陣には大都督の周瑜副都督の程普を初め武官一同列を
正して居並んで居りましたが人々に於ては周瑜は如何ある事

を逃べるかど心得様子を見て居りまゝの諸葛亮孔明も其の隙
 に列あつて居りましたが周瑜何思ひけん孔明に向ひ 周時に
 先生最早曹操の水案を破る事も近きにあり就ては先生に能き
 計畧あらばお教之に預かりたい 孔明は怪しからん事若年の
 孔明中々周瑜督に對して計畧を教ゆるおどいふ事は及びも
 附かん事 周イヤさうでないぞうか先生の思召しを承まはり
 たい某がしも思ふ事を尊公に申し入れる 孔明然らば斯様いた
 さう都督尊公も志しを手の平へ書て出玉へ孔明も志ざしを
 いて出さう 周夫は至極面白いとソコで孔明が何か手の平に書
 周瑜も手の平に書いて出し椅子を側に寄せて二人は手を見せ
 合しましたが外の者は驚ろき何だらう此の席で何個を掴んで
 居るといつて尙も様子を見て居りますと 孔明どうも恐れ
 つた大都督の思ふ處も某がしの思ふ處も一ツだ然ば是を以て

事をいたせば必ず計畧成就するに相違ない孔明と周瑜の
 二人は互ひにニツコリ笑ひましたが外の者は何の事やらサッ
 パリ解りません扱其日の會議も相濟み周瑜も我が席へ戻りま
 して酒を飲んで居る處へ一人罷り出でまして ○龐統かお入
 來になりました 周ア、左様か是へ案内をいたせ………是は
 統宜い處へ参られた先づ一盞を傾むけるやうに 龐イヤ酒を
 飲みに来たのではないが周瑜督に内々申し入れたい事がある
 どうか別室へ案内をして貰ひたい 周左様かソコで秘密室へ
 案内をいたし 龐扱何事を今日評定の席で尊公の手に書いた
 文字と諸葛亮先生の書いた文字見はいたさんが醒統は大体知
 つて居る火といふ字を書かれたらう流石は周瑜督孔明何づれ
 も軍師で曹操の大軍に當たるには尋常の事では往かん火を以
 つて是を討破らんとするは名策ではあるが併しおがら只々水

三 國 志

を以てて船を焼かんとすど雖も五艘十艘焼いた處が何に
もあらかい多くの船東西に別れたた時には容易に是れを焼捨
る事は出来ない夫を一ツにして焼失あうといふには某がしの
考がへる處にては先づ連環の計畧を廻らすの外あは此の連環
の計畧といふは即ち環を造り鎖を以つて多くの軍船を一ツに
纏めて終ひ夫へ火を掛ければ必らず一時に焼いて終ら周瑒
らくの間だ龐統の顔を見て居りましたが周是れはらうと士
玄宜い考がへだが中々那の曹操といふ人物も容易からざる注
意深い男だから連環ふ計畧を施せこそうとして其の事を孔
明がのたすまい。龐固より尋常にして其の計畧を施せいそこ
とは出衆あは然かれども孔明今日此の呉のにへ來たつて軍事
に就いて盡力をそるも之れ主人の玄徳を扶け是を世に出ださ
うといふ志さしから起るも周都督も又大都督の任にあつて

三 國 志

晝夜心を苦しめるも計畧の爲を施せばなり某がしも果の
國に生まれ今日まで深き思を業もつて居る上は呉の國の
事を備らかきければならん依つて業がし茲に揮つて連環の計
畧を施こさう周瑒此の時に至つて龐統士玄の手を取つて其こ
び 愚我が思ふ處孔明の思ふ處も全しく火といふ文字を隠た
めた事を能く知る位ぬの魯公が自から連環の計畧を施こすと
あらば必らず其の事を遂げるに相違あはと二人密談をいたし
て居りまする内にヒンヒンと外から通じて居りまする
を引いた者がある是は秘密席でございますゆゑ用事ある者も
中々這入る事が出来せんから若し用事ある時には其の網を
引くやうになつて居ります周瑒此の時に周龐統暫らく待ち
玉へど中に留めて置いて自から室外に出で見るど一人の小
官夫へ手を仕いて居ります周何だ。先達てお出でにあり

三 國 志

ました蔣幹といふ方が辱たび見えられまして都督に面會を
いたしたいと申しますが如何取斗らひませうか 周ウム蔣幹
が来たか只今對面をいたを暫らく待たして置けと再たび中へ
這入り 周 龐統此の計畧は成就せる 龐何が参つた 周蔣幹
子翼が又来た此の計畧をいたさすとせる處へ蔣幹子翼が来た
のは何より幸はひ然らば斯様く にいたさうと何やら二人相
談をいたし其儘に龐統は其の席を立ちました周瑜は我が席に
復りまそると部下の人々大勢夫へ扣けて居りまそると其の真中
へ蔣幹子翼を案内いたす蔣幹といふ男はまだ己れの計つて來
た事は願はれんと思つて居りまそるとから澄し込んで夫へ参り
まして周瑜を見て禮を施さうとせると周瑜大ひに怒つて
周夫に來りしは瑜幹子翼ではないか世の中に汝如き奴はあ
汝とは同じ學校より出で深く交はりをいたして居つたるに

三 國 志

永の歲月何れへ罷り越したか知れせ此の節に至つて汝來つて
申しけるは諸國を實見いたして参つて未だ何れへも主取もい
たした事はあゝい遇士にあつて手習素續の指南をいたして居
あどいひあがら酒を飲み室を全じうして眠る間に卓の上
置いたる蒸瓊張允の許より寄したる處の大切ある書を奪ひ去
を汝持歸つて曹操に遺はし我が大切の味方となした蒸瓊張允
の兩名を討取りしは全く汝の悪策より出でたる事であらう
然るに又しても此の國に來り我れを欺むいて再たび目欲さ
あらば奪ひ歸らんと志ざしからん斯く申する周瑜を夫程に
でに愚しき者と思ふと此の場に於て汝の首を速やかに計つ出
は最易しと雖も軍神を汚すの虞れあれば暫時の間命を紅
し四五日の内には其方を首といたして呉れんソレと下知を
なしたる時に十七八名の者忽ち左右より取つて掛り蔣幹と

引立てんといたしませる蔣幹色を變へて
蔣周都督暫らく許し玉へ某がし決して尊公を欺むいたる次第ではある、又孫瓚を振つて我れを欺むかんとする、雖も最早汝に欺むかる、周瑜で、おどい、忽ち又下知を傳へ大勢にて是を引立て、裏の西、山といふ恐ろしき難所へ左右の手を取り引揚るやうにして、て参りました、然る處蔣幹、圖らむ此の山中に風難先生に出會し、遂に此の山を遁れて曹操の許に歸るの御話しより、愈よ、呉、大合戦に及び、孔明七星壇に風を祈るの講談は、次席に委しく、上、升、

第十七席

山中へ引來られて破ら家の中に押込められた蔣幹は、胸中にア

、しまたつた、來なければ宜かつたが來ればかりで遂々斬んき目に遇うと、後悔をいたし山奥まで参りますると、破れたる家が、一軒出來で居り、すしてどうも物凄處でございます。○「サア是へ這入るんだ、蔣ウム、此所へ一人で這入つて居るのか、食物は、どうして呉れる。○「食物は都督の命令に依つて是へ運んで、や、何處へも行く事はならんぞ、此山は麓へ參る道筋もあるが、何れも見られる通り、八方に番小屋が出来て居るから、何處へも出る事は出來ない、若し是を遁れんとする時は、忽ち引捕へられて、己れで罪を重くするやうなものだから、神妙にして是に居なさい、蔣ア、左様か、どうも周都督の機嫌を損じて、大きに悪かつた、誰か外に居るか。○「誰も居ない、只一人、是へ這入つて居るのだ、どうも恐れ入つたな、送つて來た者は、其の破れたる家へ子翼を入れて、皆を歸つて終つた歸に一人子翼は茫然と

してア、何の事だ斯んな處に一人で這入つて居られるもので
 さいが然ればといつて逃げやうといつても成程逃げる道はな
 い充分に鬮を拂へて居るからどうする事も出来ん情けない事
 だと思ひ一人で黙然として考へて居ると暫らく經ちまして
 ○子翼食を持つて參つた又明日持つて来てやる 蔣是はさう
 も忝しけない ○此處に水がある食物三度〳〵〳〵から屈ける
 から其の心算で居るさう 蔣さうか何分頼も持つて来られな
 かつた日には大變だ遂々其の晩は其破れたる小屋の内に寐て
 終つた翌日にあると又明日の番兵が食物を持つて参り ○サ
 ア是を食いなさい併しさうも氣の毒千萬だ貴様も周都督の學
 友だといふのに心得違ふをしたばかりで斯んな事になつた
 蔣イヤ私も心得違ふをした譯ではさいが周瑜の怒りに觸れて
 夫を言解く事が出来まい御身等にも斯様に手敷を掛て誠に氣

の事だ是は聊さかだが蔣幹子翼幾らか金の貯はへもあるか
 ら夫へ取出して食を持つて来た男に遣ると番兵喜こんで ○
 是はさうも忝しけまい斯んなに頂だいては濟まん 蔣イヤ宜
 いから取つて置きなさい ○然らば貰つて置く又正午に食物
 を持つて来るから 蔣〴〵濟まんけれども正午に来る時にさ
 うか酒を附けて持つて来て貰ひたい ○さうして見張が居るか
 ら酒おどを持つて来る事は出来ない 蔣夫を内所でさうか持
 つて来る工夫はあるまいか酒の代は別に何かと又何某かの
 金を渡してやりましたから地獄の沙汰も金次第とは能いつた
 もので番兵其の金を受取り ○夫ではさうかして持つて来たや
 うといつて別れましたが又正午時分にあると辨當を持つて来た
 ○サア〳〵持つて来たよ僅かの酒だけども是へ持つて来るに
 は大變だ〳〵懐ころから三合ばかり遣入る風單を出した子翼是

三 國 志

を見て、蔣、是はさうも有難い。○サア飲んで終つたら其の
單を此方へ出しなさい。蔣、持つて行かれるのか、某がしは小
い物でチビくやるのが好きだ。○そんな事を申して居ては
往けぬ。蔣、然らば今、是を飲んで辨當を食すから暫時待て
いた。い、といひながら蔣、幹又黄金を出して、蔣、時に貴公に話
だか此所に是だけの黄金がある。○ウム、夥だしい金持だナ
蔣、夥だしいといふ程では無いが、さうたらう一ツ山道の外に
へ出る道はあるまいか、道があるなれば教えて貰ひたい。○夫
は往かん山道の外に出る道は無い事は無いが、其の道を教える
事が知らずやうものなら、某がしは首を刎ねられて終る。蔣、イヤ
決して御身に迷惑の掛るやうな事はしない、一旦通れればか
らす相當の報ひは後にする先づ差當り此處に是だけの金があ
るから皆んな其の許に進ませるがさうか、致して貰ひたいといふ

三 國 志

後の男、暫らく是を見て居りましたが、其の如きは金といふと
きに眼が眩むものを見て。○夫ぢやア内々、詭しき事を
に甚い懸所ではあるけれども、固めをしてゐる外に、まだ谷川に
傳はつて下りて行く、拔道がある、首尾能く此の道さへ通れば
岸へ出る事が出来る。蔣、ウム、この方角に當るか。○其の方
道を取つて細い谷川を越えて行くのだが、中々尋當に通れる處で
はない、我々共は食を運ぶのに尋當の道を廻つて來ると、遠い
ら、夫で近道を來るが、此の事は決して人にいつては往かんよ
蔣、夫は千萬忝じけない、此處は空だから持つて行つて貰ひたい、ソ
コで蔣、幹子翼は三合ばかりの酒を飲で夫を渡し、其者の立脚
ました跡で子翼は、ア、金ゆゑに眼の眩むものだ、僅かの金の
爲に大切の道を明した、晝間は逆も往かんが、夜に廻れて其の
の方へ道を取つて通れ出でんと思ひました、が、其の異といふ

方角が何方に當るか分らない、是はさうも困つた、折角道は教は
 つたが太陽の光さへも分らぬ位ぬ深山の事ゆゑ、何れが異に
 當るか分らないので、大きに困ると考へ居りますと、風の持
 て来るまに、頻りに本を讀んで居る者がある、見えまして
 其の聲が時々聞ける、ハテナ山中で誰か本を讀んで居るが遠く
 おれば聞ける氣、支ひはあいが、是は行つて様子を見届けやうと
 思ひましたるから、蔣幹子翼、其の讀書をして居る聲を知、遂に水
 て見ると、破れたる垣根がある、其の中に一軒の茅屋に彼方向に
 なつて傾りに本を讀んで居る者がございますから、垣根の處
 に立留まつたる蔣幹子翼が、ウームと呻つた、スルと本を讀んで
 居た人がヒタリと止めて終ひ、△誰だ夫へ參つたは、何者だ、
 都督の部下か、悪人の手下か、蔣イヤ、△誰だ夫へ參つたは、
 周都督の部下ではあゝ、昨日から此の深山に閉籠められ出で

道を失つて、大きに艱難をして居る某が、しは蔣幹字を子翼と
 申す者でござる、△ハア子翼といふは貴公であるか、蔣、
 其許は何誰でござるか、△拙者は胤統字を士元といふ者だ
 蔣、扱は鳳雛先生と申して、斯様お處に、胤、イヤお尋ねは無用だ
 我は此度曹操を對手に戦かひを、お事、は飽まで反對の説を
 取し、處周瑜曹操を恨んで、一戦の許に倒さんといひ、主人孫權は
 元心決せざる人、おれば終に周瑜の言葉に心動き、彼に對し、
 の任を授け、玉ひたり、某がし、尙孫權を諫め、周瑜をも大いに
 りたるが爲に、遂々此深山へ、并籠められ、戦争相濟までは、
 出る事はあらん、日々此所にあつて、徒然の餘り、食物を讀で、
 日を送つて居る、蔣、ハア扱は、尊公も周瑜の爲に、此の深山へ
 押籠の身とあられしか、何と只今より、志さしを轉じて、曹操に
 し御降參なさらんか、曹操の許に至つて、軍師となつて下されば

是に越したる幸はいはないが某がし言葉を盡して御周旋を
たぞ 願我周より曹操に降り周旋を敵として事を爲さんと思
ふ事 屢々なれども山道に關門を構へて此の山を出でる事能は
せ依つて如何しむ致し方なく此通り謹しみ罷り在る 燕イヤ
拙者が間道を知つて居るから御案内をいたす 願ハ、ア如何
にして其許は此の山道を抜出づる道を御存じた 燕實は斯様
々々云々にて番兵の者より教えられましたが大に只此のみ助い
て何れの方角が罪に當るか夫が分らるので大に困つて居る
處幸はひに方角を御承知あればどうぞお教え下されたい
ウム 然らば某がしが御身と與に此の山を通れ出で曹操の陣へ
罷り越した時に曹操必らず斯申そる 願統を部下にお使ひ下さ
るか 燕夫はモウ誓て斯申そる子翼が命に掛けてお使ひ申さ
願の手許には百萬の勢ありと雖も軍師といふものが謀りに以

い然る處尼下の如き人物が味方に相成れば必らず重く用ゆる
に相違ない 願夫は千萬驛じけあいな然らば拙者翼の方角を心
得て居るから同道をいたさうと早速に兩人其の道を探ね細き
谷間を越え道なき處を渡り漸々にして南の岸へ出でました丁
度此所に已れが乗つて参りました小船が繋いでございますか
ら、其の船に乗つて願統と共に此所を通れました、どうして斯ふ
都合能く参つたといふに之固より周瑜の計畧で番兵に申附け
逃げるやうに南の岸へ彼れを渡さしめるのでございませぬ、扱是
より願統曹操の許へ参つて茲に連環の計畧を行ないませぬの
一條は次ぎに申上开

第十八席

扱蔣幹子翼は願統を案内いたし忽ちちの間に船を水際近くへ
寄せ、副都督于禁の船へ参りまして、夫へ願統を待たせ置き自分

三 國 志

に於ては直ぐに曹操の前へ罷り越して 蔣云々斯様くの次
第一周瑜怒つて我れを深山へ追込み恰で半内同様處へ置き既
に一命も危うからんとおしたる處是より前に周瑜と議論の合
ざる爲めに是亦山奥へ押籠れ居たる龐統士元に面會をいたし
漸やくに難道を越えて南の岸へ出で船に打乗り龍統を之へ案
内いたしました當時鳳龍鳳離といつて臥龍とは則ち孔明の事
鳳雛とは此の龐統の事を申し實に一對の名士と言はれる位ぬ
其の龐統周瑜を恨んで味方に降らんといふは何より早速四百
餘州は君の手に握つたやうなものでございませぬ早速御目通り
仰せ附けられた上に龐統は重くお用ゐるに相成へて宜しうござ
いませう曹操是を聞いて大きに喜こが 曹夫は何より早速に
目通りをいたすであらうソコ蔣幹子翼の案内を遂げて●統
といふ人陸地へ罷り越本營へ來つて見ると武官文官右左に列

三 國 志

あり實に立派やかあるものでございませぬ
を施こしたる事にて 應是は相丞にて在するか初めて拜謁を
いたす龐統守は士元と申する者此度圖らずも蔣幹子翼の案内
に依つて當陣へ罷り越君に示謁を遂げるは誠にも某がし身に取
て喜こばしく存する某がしに於ても呉の國の爲めに充分力を
尽すの心底にありし處周瑜暴政を還せしうし終に君の大軍に
當つて取かひをなさんとし尙某がし是を諒めたる處怒つて終
に某がしを深山に押籠め再び世に出づる見込も無之に依つ
て子翼の案内を幸はひに是に罷り越したる次第何卒相當の役
目あらば君の爲めに犬馬の勢を尽そに依つて何なりとも仰せ
附けられ度う存する是を聞いて曹操大いに喜こび 曹イヤ我
れ幸はひにして君の如き名士を得たるは此上なき喜こび呉の
國の滅亡もハヤ近きにあり早速悦こびの祝ひをいたすべしと

あつて茲に酒宴を開く事に相成りました然る處龍統士元は何
 か軍談でも致すであらう此の人は固より兵書を能く讀んだ人
 であるから定し軍事の話をするだらうと思つて居ましたる處
 少も軍の話しを致しません只俗談をのみ致して酒を飲み遂々其の
 晩は本陣に飲明し夜が明ると曹操自慢で御座升るから蔣幹子
 翼と龍統士元の兩人を伴ない部下百人ばかりを連れて陸陣の機
 子を龍統に見たさうだ俺は斯いふ陣を布く剛ひ者だらうとい
 はんばかりに案内を致ました龍統陸陣の様子を見て手を打て
 威心を致し龍統に恐れ入たる處の此陣立某がし見る處にても
 一度令を傳れば進退懸引自由にして其兵の働き易き事己の手
 足を動す如からん是なれば如何に敵大軍にて寄來とも是を防
 ぐの道は充分也實に陸陣の備方といふ者は法に叶て妙を得り
 と龍統右様一言を吐て曹操を喜せる 曹然ば此上水案を見す

べしと夫から今度水案の方へ連れて來た威心ををるかと思
 へしと陸陣を見た時とは打つて變り何となく不満足の様子だ
 々見て居る處が少しも賞めまい二十四座に船陣を立て實に
 陣よりは嚴重に造つてございまするが龍統は氣に適らない
 曹統我が水陣を見て一言も發せざるは何か不満足の事あり
 と思ふからば遠慮さうお教を願う 龐イヤ君は北國に育つ
 と申すも如何に候へ共陸陣の進退懸引兵の配り備ひ立に於て
 は一言の申し分もなければ水陣に至つては餘程不馴で在せら
 れると見える是では中々油断は損ませんぞ周瑜といふ人物
 は永く水軍を司さざり願ふる水練には妙を得たり然れば船
 を造る事は最も得意なる男でござる先刻より此の水軍の有様
 を見るに只二十四座の船陣は備えありと雖も何れも北國武
 士にして船の中にあつて充分なる備らさそいたそ者が少ない

船の動くに依つて自から倒れるやうな事があるに相違ない。曹
操は是を聞いてハタと手を打つて、曹如何にも風船のいはれる
通り我が兵多しと雖も水軍に馴れたる者少なく然ればにや
敵陣へ進む事能はざるのみならず病いの爲めに倒れ更に戦争
の役に立たざる位は願はくは鳳雛先生一同の病ひを治し充分
なる水軍に働らきを出來得る名策があるなればお教ふに預か
りたい。應然れば兵士の病ひを凌ぎ充分ある働らきをまさし
むるの名策といふは外ならせ固より田野を駈けるに妙を得た
る者が船の上にあつて働らきをいたし能はざるは當然の事、是
を防ぐには連環をなして此の船を仮令何艘ありと雖も残ら
せ鎖を以つて繋ぎ止めるに如かき尤も号令に従がつて是を
解はとも事も出來得るやうにいたせば、イザといふ時に四方に
散亂する事も出來る先づ兵士を病ひに附かしめざるには連環

をなすより外に工風はござるまい連環をして其の上に板を並
べる時は宛然平地に居るが如く充分ある調練も出來更に動
せざるに依つて病ひを惹起す者もあひ、曹成程と手を打つた
る曹操、曹是は鳳雛剛ひ環を造り船を繋いで其上に旗を並べ
平地の如くにあして置けば必ら走一同の者痛ひに罹る氣支ひ
もあるまい、早速夫に取掛るやうに「といつてソコで多くの經治
屋を招き戦争の時にはモウ夫々の職工も多く居りまそからド
ン／＼銷を造らせ龐統の言葉に従がい連環をして其の上に板
を並べ恰で江の内に大いなる離れ島が出來たやうなもので勿
まぢの間に此の連環の計畧が成就をして就ては龍統士元も己
に曹操に降り猶其の他にも追々周瑜を恨んで魏に降る者あり
と聞いて曹操は大いに喜び龐統に向つて、曹吳の國に於て
我れに降らんとする者多くあるとの事は己に承たまはる事、

三 國 志

は先生大儀がら再び呉の國へ参り夫等の人を説いてと
か同道をして貰いたい 龍成程夫は君の仰せの如く我れ密か
に呉の國へ至つて志ざしある者を説き船へ乗せて再び此の
國に参るやうにいたさう 曹然らばどうかさういう事にして
貰いたいといふので愈よ一旦龍統は歸る事に相成りました然
るに曹操は多くの金銀其の外の名木名刀などを澤山に夫へ
出し 曹扱は是は龍統我が志ざしであるからどうか持參をして
貰いたい此の時に龍統見返りもせず曹操の顔を睨んで
れながら相送は人を見事を知さる御人と見える某がしは怨の
爲に是へ参りしにあらす只呉の國の周瑜一人にて其政權を
り民を苦しめ兵士を苦しむる事を願みざる左様なる者に従い
居る事を厭いて此の國へ來りしに金銀名木を積んで我れ與る
とは何事あるや龍統は新様な者を願る眼を持たせ只此の上は

三 國 志

呉の國に兵を入れ假令其の國を平らぐると雖も決して人民
を倒し玉ふな假令如何に亂軍に相成るとも漫りに領民を苦し
めざるやうにいたして貰いたい然れば民に於ても君を慕つて
自から靡くに相違ござらん某がしは敢て金銀名木を賜はつて
夫で快しとぞる者ではかい何卒我が志ざしの程をお察しあら
ん事を願う某がしは是より一旦呉へ戻り名士を説いて必ら
是へ案内をいたそに依つて幸はひに夫を用ゐられるやうに願
うと龍統一言の許に曹操を瞞着して終つて早速に船の用意を
いたし大勢送つて参るといふのを 龍勝手を存じて居るに依
つて決して送るに及ばんといひ一同の者を断はり只一人船を
出さうといたましたる時に何者とも知れぬ我れ我れの茂みの内
に聲あつて ○大賊龍統待てッ士元色を獲へてハツタと睨み
龍何奴なれば我れを差して賊とはいふぞ今一言いつて見よ其

百九十八
儘には拾遺かんぞ大賊羅統とは何事なるや ○如何にも賊に
相違ない資を盗む賊もあれば人の命を断つ賊もあり汝我君を
偽つて連環の計畧を施こして百萬の兵を鑿ろしにいたさんと
せしならん餘人は知らま某がしは此の計畧を充分に察したり
前には黄蓋苦肉の計畧を施みし又闕澤を遣はしめ偽はりの降
参狀を送り再び汝來つて我君を欺むき環を遣つて船を聚ぎ
連環の計畧を施こして立歸らんとするか最早一寸も其所を助
かさずと聞いて羅統士元に於ては扱は露頭いたしたるか去る
にても我が連環の計畧を察したる者は何者あるかと思ひ見上
げし時に被つて居たる笠を向ふに剣退け、ヌツクと夫へ立出で
しは三尺に餘る劍を横たゑたる事にて面真白にて聊さか聲を
願ひ貯はへ兩眼清らかにして一見天晴の名士と思ふばかり之
即ち蜀州の徐庶字を元直といへる人なり、羅統此時に元直の

を見て 羅統は汝は徐元直我が計畧を知つたるか 徐如何に
も知らまして何とせん我が百萬の同勢を鑿ろしにせんとする
の奸賊覺悟に及べど劍を抜いて打つて掛る、羅統同じく劍を引
抜きしが茲に兩人唯雄を決するか如何に……

三 國 志 卷之五

明治卅一年九月廿一日印刷
 全 年九月廿四日發行

東京市淺草區公園第六區三號百四

桃川燕林事

講演者 蘆野萬吉

東京市神田區新石町四番地

發行者 市川路周

東京市神田區鍋町廿四番地

印刷者 橫田磯吉

東京市神田區新石町四番地

發行所 文事堂



文事堂 新版書目

桃川燕林講演 今村次郎速記 赤穂 義士四十七士傳 全十冊 一冊二付 全部一割引 二十錢	桃川燕林講演 今村次郎速記 德川十五代記 全七冊 一冊二付 全部一割引 五十錢	桃川燕林講演 今村次郎速記 源平盛衰記 全四冊 一冊二付 二十錢	桃川燕林講演 今村次郎速記 桃川燕林講演 高島政之助速記 西遊記 全五冊 一冊二付 二十錢
伊東駿湖講演 鬼坊主清吉 全一冊 二十錢	桃川燕林講演 敵鶴權兵衛 全一冊 廿五錢	桃川燕林講演 梅川忠兵衛 全一冊 二十錢	田邊南麟講演 高橋お傳 合本一冊 廿二錢
錦城齋貞玉講演 梅野由兵衛 全一冊 二十錢	眞龍齋貞水講演 客會津の小鐵 全一冊 十八錢	錦城齋貞玉講演 荒川武勇傳 全一冊 廿五錢	桃川燕林講演 松前屋五郎兵衛 全一冊 廿二錢
大久保彦左衛門 全三冊 一冊二付 二十二錢	桃川如燕講演 佐倉宗五郎 全二冊 一冊二付 二十二錢	一冊二付 全部一割引 二十錢	錦城齋貞玉講演 實話 明治天一坊 全一冊 二十錢
全二十冊 一冊二付 全部一割引 二十錢	全二十冊 一冊二付 全部一割引 二十錢	全六冊 一冊二付 二十錢	